

北海道立埋蔵文化財センター

年報14

平成24(2012)年度

北海道立埋蔵文化財センター

年報14

平成24(2012)年度



▲重要遺跡確認調査 芦別市野花南周堤墓群の立地 東南→



▲重要遺跡確認調査 芦別市野花南周堤墓群 北→

目 次

1	設置の目的	1
2	沿 革	1
3	施設の概要	1
	(1) 工 期	1
	(2) 面 積	1
	(3) 組 織 図	2
	(4) 職員名簿	2
4	調査研究事業の概要	2
	(1) 重要遺跡確認調査	2
	(2) 研修・情報収集	10
	a 文化財保存修復学会第34回大会	
	b 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会	
	c 第3回文化財写真研究会	
	d 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会	
	e 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会 北海道・東北ブロック会議	
	(3) 埋蔵文化財に関する調査研究	
	a 「保管遺物の材質、原産地等についての整理 3」	15
	(4) 分析・鑑定・保存処理等	17
	a 分析・鑑定	
	b 保存処理	
	(5) 道・市町村教育委員会支援など	17
	a 指導・協力等	
	b 埋蔵文化財担当職員現地研修会	
	c 埋蔵文化財担当職員研修会	
5	収蔵・保管事業の概要	20
	(1) 収蔵資料目録	20
6	普及・啓発事業の概要	22
	(1) 展示活動	22
	a 常設展示「掘り出された北の歴史」	
	b 企画展示	
	①「縄文人に挑戦一見る、触れる、つくる、縄文生活体験ひろば」展	
	②北海道遺跡百選 5 「北海道遺跡空中散歩一空から遺跡を見てみよう」展	
	③財団法人北海道埋蔵文化財センター平成23年度発掘調査成果展	
	④世界遺産をめざす北の縄文展	
	(2) 資料の特別利用等	27
	a 特別利用一覧	
	b 模写品等使用承認一覧	
	c 資料貸出承認一覧	
	(3) 考古学教室	29

1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、展示公開並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

2 沿革

平成7年

3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定

平成8年

9月 本館基本設計完了

平成9年

3月 本館実施設計完了

10月 本館建設工事着手

12月 別館（整理作業所）基本設計完了

平成10年

3月 別館（整理作業所）実施設計完了

9月 別館（整理作業所）建設工事着手

平成11年

3月 本館建設工事竣工

4月 北海道立埋蔵文化財センター開設

8月 別館（整理作業所）建設工事竣工

11月 一般公開

3 施設の概要

(1) 工期

[本館工事] 平成9年10月31日着工

平成11年3月18日竣工

[別館工事] 平成10年9月10日着工

平成11年8月18日竣工

[外構工事] 平成11年7月28日着工

平成11年12月10日竣工

(2) 面積

[敷地面積] 18,599.50㎡

[延床面積]

本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）

別館：2,081.80㎡（鉄筋造・3階建；整理作業所）（渡り廊下含む）

[部屋別面積]

本館1階

調査研究室（253㎡）

保存処理室（167㎡）

観測・計測室・修復室（47㎡）

金属製品処理室（31㎡）

分析室（48㎡）

実験室（53㎡）

撮影室・暗室（105㎡）

図書室（177㎡）

一般収蔵庫（399㎡）

展示収蔵庫（321㎡）

展示室（310㎡）

本館2階

所長室（47㎡）

事務室（241㎡）

特別収蔵庫（227㎡）

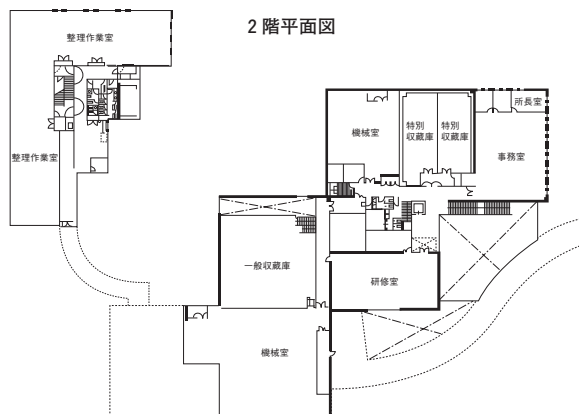
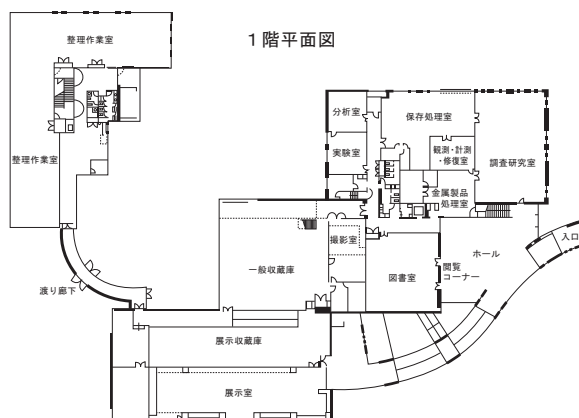
研修室（196㎡）

一般収蔵庫（319㎡）

別館1階：整理作業室（520㎡）

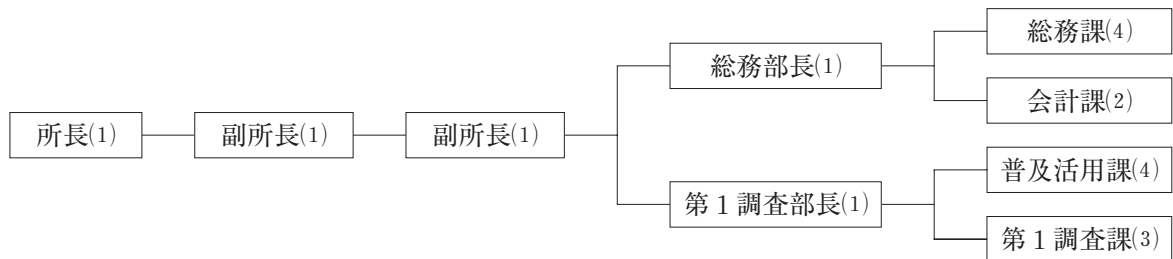
別館2階：整理作業室（540㎡）

別館3階：整理作業室（220㎡）





(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	坂本 均	総務部長	和田 基興	第1調査部長	千葉 英一
副所長	畑 宏明	総務課長	葛西 宏昭	普及活用課長	鎌田 望
副所長	中田 仁	総務課主査	小杉 充	普及活用課主査	藤本 昌子
		総務課参与	前田 克己	普及活用課主査	倉橋 直孝
		総務課参与	前田 博	普及活用課主査	藤井 浩
		会計課長	礪田 千秋	第1調査課長	田口 尚
		会計課主査	中村 貴志	第1調査課主任	吉田裕吏洋
				第1調査課嘱託	高橋 美鈴

4 調査研究事業の概要

(1) 重要遺跡確認調査

1 重要遺跡確認調査

北海道立埋蔵文化財センターでは、北海道教育委員会において、北海道史をたどる上で重要と考えられる遺跡についての重要遺跡確認調査を実施してきた。

これまでに平成12年度に小樽市・余市町所在の西崎山ストーンサークル、平成13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、平成15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚、平成17～21年度には幌延町・豊富町に所在する音類竪穴群で実施した。

平成22年度に「重要遺跡確認調査について」（平成22年8月9日付教文ス第1362号）が北海道教育委員会から通知された。その「平成22～25年度重要遺跡確認調査実施要領」により、平成22・23年

度は斜里町朱円周堤墓（道指定史跡：指定名称「斜里朱円周堤墓及び出土遺物」）、平成24・25年度は芦別市野花南周堤墓群（道指定史跡：指定名称「野花南周堤墓群」）が重要遺跡確認調査対象遺跡として示された。

2 芦別市野花南周堤墓群の調査

本年度は芦別市野花南周堤墓群の調査を行った。調査は平成24・25年度の2カ年を計画している。今年度は測量調査・空中写真等の撮影、出土品の資料化、発掘調査を行った。

【調査要項】

調査対象：芦別市野花南周堤墓群

（道教委登載番号E-04-21）

平成12年4月14日道史跡指定

所在地：芦別市野花南町3256、3257

調査面積：1914㎡（史跡指定範囲面積）



図1 遺跡の位置

30㎡（今年度発掘調査面積）

調査期間：平成24年7月24日～26日

（測量・写真撮影）

平成24年9月4日～14日

（発掘調査）

【遺跡の現況】

芦別市街地から南東約10kmの「野花南」地区に位置し、空知川左岸の河岸段丘上、標高約120mの平坦面に立地する。史跡指定範囲内には大小2基の周堤墓（1号周堤墓、2号周堤墓）が現存する。

1号周堤墓は史跡範囲内の南半部分に位置し、最大径約25mの明瞭な円形の周堤を伴う。周堤内には石組と立石が見られ、周辺を覆うように小円礫が数多く見られる。

2号周堤墓は1号周堤墓の北にあり、規模もより小さいものとされるが、周堤が失われているため詳細は不明瞭である。中心部とされる位置には直径1mほどの落ち込みがあり、底面には石組が残る。

【調査の履歴】

昭和28年、芦別市郷土研究会により周堤と思われる円形の盛土と石組が発見された（1号周堤墓）。

昭和29年、河野広道氏により2号周堤墓の発掘調査が行われた（当時はわずかなくほみが認められていた）。

昭和30年、近江正一氏により1号周堤墓の石組下の発掘調査が行われた。

昭和37年、芦別市郷土研究会により、周堤墓内の整備が行われ、周堤と石組が復元された。

昭和42年、北海道教育委員会の遺跡分布調査にて測量調査が行われた。

【文 献】

野村 崇 1974「第1部第2編第4章 芦別市の先史遺跡」『芦別市史』 芦別市

長谷山隆博 1994「考古学からみた芦別の歴史」『新芦別市史』 芦別市

矢野 等 1998「野花南環状土籬について」『郷土研究19号』 芦別郷土史研究会

3 測量調査・空撮写真等

測量作業及び空撮については㈱シン技術コンサルに委託して実施した。測量作業では史跡指定範囲についての現況平面図を作成した。併せてラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

【指定区域表示の明確化】

境界杭8カ所の現況を確認した。現存する杭が3点、破損1点、不明4点を確認した。現存の3点について現地測量を行ったところ、いずれも地籍測量の成果と合致しないことが判明した。このズレの幅が約30cmから1mと大きなものとなったため、境界杭の復元は困難であると考えられた。現時点では、地籍測量の座標値を基に図上にて指定区域範囲を明示することとした。今後の作業については道教委及び市教委との協議中である。

【基準点・水準点の設置】

基準点はGPS測量にて座標値を確定し、現地にH24T1（X=-59998.407 Y=1778.841）、H24T2（X=-60000.767 Y=1819.029）の2点を設けた（平面直角座標系XⅡ系）。

水準点は近隣に公共水準点がなかったため（20km以上離れる）、より精度を高めるために電子基準点を用いたGPS測量による間接水準測量を行った。現地にH24T1（H=120.563）、H24T2（H=119.655）の水準点を設置することが出来た。

この測量にあたり、近隣でも同様の測量が行われ、双方の標高値間で0.117mの差があることが明らかになった。観測方法の違いにより生じた結果で、国土地理院が認める誤差の範囲内であり、使用には問題がないため、今回測量した標高値を用いることにした。

また、史跡範囲内に発掘調査のための測量基準杭を7カ所設置した。平面直角座標系に基づき、X=-60000ラインに3カ所（Y=1820、1830、1850）、X=-60030ラインに1カ所（Y=1860）、X=-60040ラインに3カ所（Y=1830、1850、1860）である。いずれにも4級水準の標高値が付されている。

【公共測量に準じた地形詳細測量】

今年度は史跡指定範囲についての現況平面図を縮尺1000分の1で作成した。作図にあたり、平成10年度㈱シン技術コンサル作成の現況測量図（野花南環状土籬測量図）を基にしたが、座標が日本測地系に基づくものであったため、世界測地系に変換し、地籍測量データと合わせて新たに作図を行った。

【空中写真撮影及び俯瞰撮影】

ラジコンヘリによる史跡と史跡周辺環境の空中

写真撮影を行った。空知川を含めた遺跡周辺の俯瞰写真、史跡範囲全体と1号、2号周堤墓の俯瞰、垂直写真を撮影した。周堤墓及びこれに伴う石組、礫群については、高所作業車を用いて発掘調査前の現状の俯瞰撮影を行った。

4 出土品の資料化

野花南周堤墓群に直接関わる出土遺物は少なく、現時点では、旭川市博物館所蔵の河野広道氏資料が遺跡内出土の可能性が高いものとして挙げられるのみである。

遺跡周辺の関連資料としては当史跡に隣接する矢野沢遺跡から出土したとされる「戸塚氏資料」が芦別市星の降る里百年記念館に所蔵されている。

【旭川市博物館蔵河野広道氏調査資料の調査】

河野広道氏が昭和29年に調査した資料が旭川市博物館に保管され、土器片23点、黒曜石製石器8点、石斧3点が「野花南」出土とされている。平成25年度にかけて写真撮影及び図化を含めた資料調査を行う予定である。

【芦別市星の降る里百年記念館所蔵資料の調査】

矢野沢遺跡から出土した「戸塚氏資料」については、縄文土器片60点、石器・石器片118点、石製品22点の計200点を借用し、今年度は一部図化を行い、次年度にかけて写真撮影を行う予定である。

遺物は土器が縄文時代後期主体で、中期、晩期のものが数点含まれる。石器は石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーなどがあり、その殆どが黒曜石製である。石製品には異形石器や勾玉、異形勾玉などがある。

5 発掘調査について（図2）

発掘調査はグリッドの設定、発掘区の設定の後、テストピットによる基本土層の調査とトレンチによる遺構の調査を行った。

基本土層の調査により史跡範囲内の土層堆積状況を把握し、トレンチ調査により、1号、2号周堤墓及びこれに伴う各石組の保存状況を確認した。

【グリッドの設定】

世界測地系の座標値を基に、座標値X=-59990から-60050とY=1810から1860までの間を10m間隔でグリッドを設定した。グリッド名は便宜的に座標値の下二桁を組み合わせて用いた(例、00-20区など)。

【基本土層の確認】

テストピット1 (X=-60000 Y=1830)、テストピット2 (X=-60000 Y=1850)、テストピット3 (X=-60040 Y=1860)の3カ所で1m四方を掘り下げて基本土層の堆積状況を確認した。

基本層序として、上から黒褐色土層(耕作土)、灰褐色粘土層、黄褐色粘土層(漸移層)、黄色粘土層(基底層)を確認した。

地表面から基底層と思われる黄色粘土層までの層厚は30~50cmほどで、テストピット2、3においては表土層に小円礫が数多く含まれることを確認した。

また、テストピット3カ所ともに耕作土が確認されたことから耕作による削平が史跡範囲の大半に及んでいることが明らかになった。

【トレンチの設定】

1号、2号周堤墓を対象に、幅1mのトレンチを3カ所設定した(トレンチⅠ、Ⅱ、Ⅲ)。

トレンチⅠ：1号周堤墓、2号周堤墓の中心を結び、南北方向に両周堤墓を横切るように設定した。全長55mのうち、今年度は南からⅠ-1区(5.7㎡)、Ⅰ-2区(6.1㎡)、Ⅰ-3区(3.6㎡)、Ⅰ-4区(3.6㎡)と名付けた部分を調査した。

トレンチⅡ：1号周堤墓の中心部でトレンチⅠと直行し、周堤墓を東西に横切るように設定した。全長44mで、平成25年度に調査の予定である。

トレンチⅢ：2号周堤墓の中心と推定される部分でトレンチⅠと直行し、周堤墓を東西に横切るように設定した。全長18mで、今年度に調査した。

【トレンチ調査の結果】

トレンチⅠ(Ⅰ-1~4区)

Ⅰ-1区は1号周堤墓南側の周堤部分にあたる。黄色粘土層までを掘り下げて土層断面を観察した。ここでは、基底層である黄色粘土層が現周堤の内側から外側にかけて緩やかに立ち上がり、竪穴の壁にあたる可能性が考えられた。壁の上部には灰褐色粘土や黄色粘土との混土が堆積し、さらにこれらを耕作土が覆うように、現周堤が構築されている様子がうかがえた。

また、周堤の外側では黄色粘土粒を多く含む黄褐色粘土の堆積が見られた。構築当時の掘り上げ土、周堤の一部に当たる可能性が考えられる。

Ⅰ-2区は1号周堤墓北側の周堤部分に当たる。1区ほど明瞭ではないが、現周堤の表層が耕作土

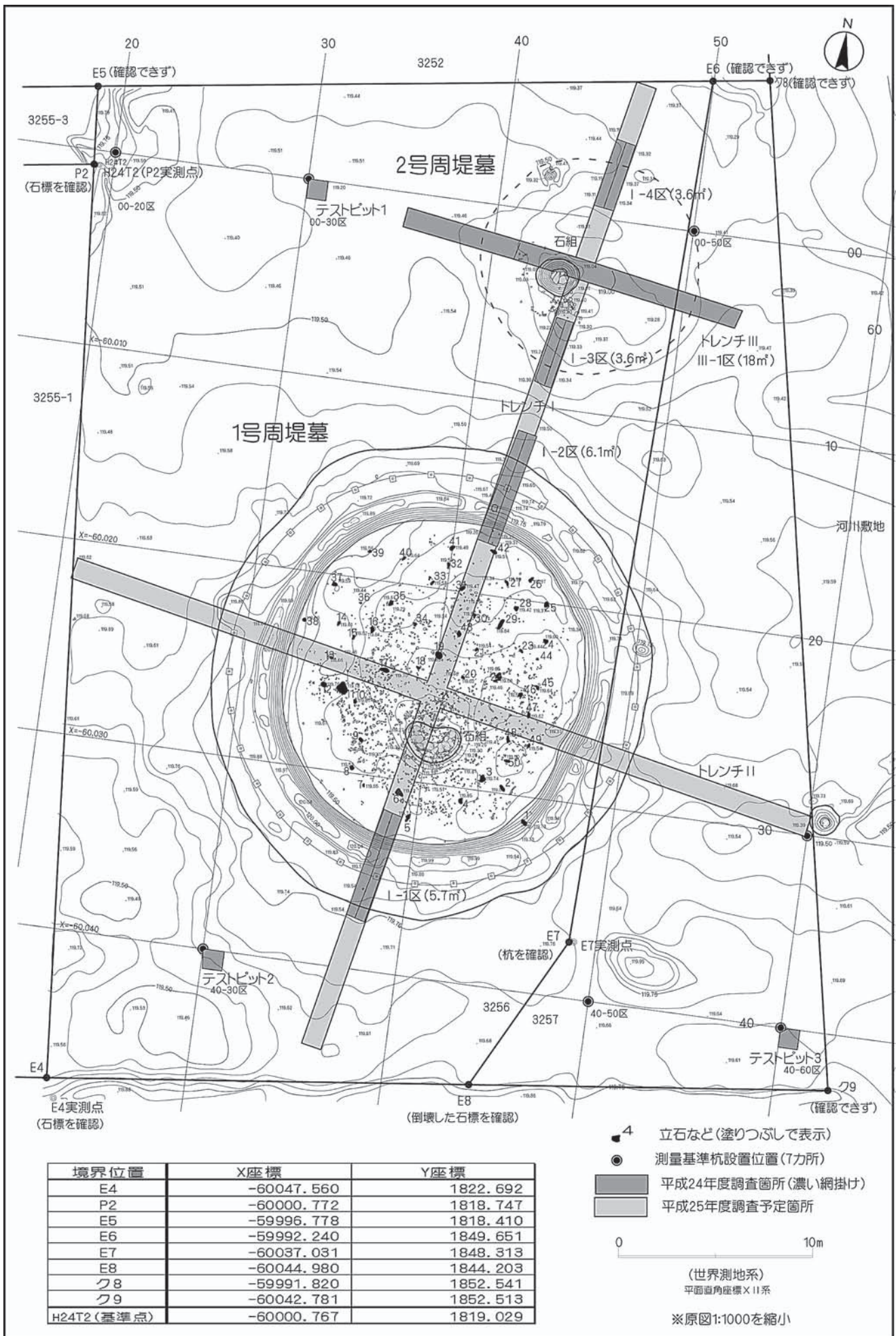


図2 芦別市野花南周堤墓群 平面図



▲トレンチ調査の準備 北西→



▲テストピットの調査 東南→



▲2号周堤墓トレンチの設定 北東→



▲トレンチⅠ・Ⅲの調査 北→



▲2号周堤墓とトレンチⅢの調査 東南→



▲トレンチⅠの調査 南西→

からなること、基底層としての黄色粘土層が緩やかに立ち上がることが確認された。

周堤の外側での堆積は黒褐色土や黄色粘土、黄褐色粘土などが交互に重なり、人為的な堆積の可能性が高い。構築当時の堅穴掘り上げ土(周堤部)である可能性も考えられるが、2号周堤墓など、別の遺構が重複していることも考えられる。

I-3区は2号周堤墓南側の範囲を明らかにするためのトレンチである。耕作土の掘り下げ時から、トレンチ北側を中心に小円礫が数多く出土した。この小円礫について昭和29年調査時に掘り上げたものではないかと考えて精査したところ、円形に落ち込む範囲の一部を確認した。小円礫の分布とあわせてその範囲を図と写真で記録した。小



▲1号周堤墓Ⅰ-1区の調査 北東→



▲2号周堤墓調査 南東→



▲1号周堤墓内の角礫調査 南東→



▲テストピット1埋戻し 西→



▲トレンチⅢ埋戻し 東南→



▲トレンチⅢ埋戻し終了 西北→

円礫の由来を求めて、黄色粘土層まで掘り下げたが、調査範囲に限りがあり、明らかにすることが出来なかった。

I-4区は2号周堤墓北側の範囲を明らかにするためのトレンチである。黄色粘土まで掘り下げたが、平坦な堆積で、周堤墓の堅穴や周堤の痕跡を確認することが出来なかった。

トレンチⅢ（Ⅲ-1区）

トレンチⅢは2号周堤墓の東西の範囲を明らかにするとともに、ほぼ中央部に位置する直径約1.5m、深さ約0.5mの落ち込みを調査するためのトレンチである。

この落ち込みの底部には4つの礫で構成される石組が現存し、昭和29年の河野広道氏調査時に発

見されたものの可能性が考えられる(矢野1998)。

耕作土の掘り下げを行い、2号周堤墓の周堤の痕跡を探したが、ほぼ平坦な堆積のみで構成され、確認することが出来なかった。

また、I-3区同様に中心部東寄りには耕作土中に小円礫の堆積がみられ、その範囲を図と写真で記録した。

【1号周堤墓内の立石について】

1号周堤墓の周堤内には、中央南寄りの石組の他に、50カ所の立石が認められる。それぞれの大きさは最大長で20cmから60cmとさまざまであるが、その殆どが角礫や板状の礫からなっている。

芦別市星の降る里百年記念館の長谷山隆博氏、郷土史研究会の矢野等氏により、これらの立石が昭和37年の周堤復元後に外から持ち込まれた、との話を聞くことが出来た。昭和28、29、30年の調査においてもこの立石についての記述がなく、当時の新聞記事の写真などにも見られないため、本来、周堤墓には伴わないものである可能性が強まった。

そこで、立石50カ所の保存状況を確認した。立石としてあるものが20点、倒れて横になったものが30点になる。立石のほとんどが耕作土上にあるが、深く埋まった5カ所についてサブトレンチによりその状態を確認した。その結果いずれも耕作土中にあることが明らかになった。

【テストピット及びトレンチ出土の遺物】

本調査で出土した遺物は131点である。すべて表土、耕作土出土のものであり、遺構に伴う遺物は見られなかった。

種別は土器と石器のみで、土器は18点、石器が113点であった。土器は時期などが特定できる特徴に乏しい小破片ばかり、石器は2点が石鏃で、その他はすべてフレイク・チップであった。また、石器はすべて黒曜石製である。

出土分布は、トレンチⅢの西側(00-30区部分)にフレイク・チップの出土が集中し、密度が最も高い。

また、立石の確認作業においても4カ所から土器片及びフレイク・チップが出土している。

【原状復帰作業】

発掘調査終了後にテストピット、トレンチの埋め戻しを行った。今回の埋め戻し作業は、次年度継続の調査を考慮して、テストピット、トレンチ

ともに、壁面の養生と併せてすべて土嚢袋を用いて行った。地表面付近の埋め戻しにはもとの表土を用いることで、景観にも配慮した。

6 平成25年度の調査計画

次年度の調査は発掘調査が主体である。特に、過去の調査の状況を確認すること、及び堅穴、石組等の構造を把握することを重点課題として考えている。

過去の調査状況の確認においては、今回確認に至らなかった2号周堤墓における河野広道氏調査の痕跡について、あらためて確認を行うとともに、1号周堤墓内の配石に関わる調査の痕跡を明らかにする予定である。

堅穴、石組等については、トレンチⅠとⅡにより、1号周堤墓の東西の周堤を確認するとともに、堅穴底面の再確認を行う。また、1号、2号に伴う各石組については、過去の調査状況の確認とともに調査を行う予定である。

いずれの課題においても、調査範囲内各所に見られる小円礫の分布について整理する必要がある。基本層序との関係を再確認し、1号周堤墓内及び2号周堤墓でも新たに確認された小円礫群の由来を求めることで、旧調査の状況や遺構の保存状況を明らかにすることが可能になるとと思われる。

なお、平成25年度において、本調査についての報告書、重要遺跡確認調査報告書第9集『芦別市野花南周堤墓群』を刊行する予定となっている。

	石器		土器	合計
	石鏃	フレイクチップ		
テストピット1		1	7	8
テストピット2		5		5
テストピット3		7	1	8
トレンチⅠ	00-40区	7	4	11
	10-40区	15		15
	30-30区	7		7
トレンチⅢ	00-30区	53		53
	00-40区	2	9	2
1号周堤墓内 サブトレンチ	立石09西側	1		1
	立石22西側	2		2
	立石29西側	3		3
	立石35西側	1	4	5
合計	2	111	18	131

出土遺物点数一覧

(2) 研修・情報収集

a 文化財保存修復学会第34回大会

期 日：6月30日（土）～7月1日（日）

会 場：東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部百周年記念館

主 催：一般社団法人文化財保存修復学会

参加者：第1調査部第1調査課嘱託 高橋美鈴

内 容：興味深い発表のものを抜粋した。

6月30日（土）

記念講演、口頭発表、ポスターセッションが行われた。口頭発表はセッションⅠ～Ⅳに分けられ、13件の発表があった。ポスターセッションでは60件の発表があり、午後に60分の解説時間が設けられた。

〈記念講演〉

「阪神・淡路大震災から東日本大震災一学会の取り組み―」

三輪嘉六 氏（文化財保存修復学会会長）

これらの震災による「動産」文化財の被災状況、神戸市立博物館の被災を免れた展示品の展示方法、東日本大震災での文化財レスキュー、それらに関しての学会の取り組みについて講演された。

〈口頭発表〉

O-02「石造文化財の合成樹脂による保存処置の耐久性」

西浦忠輝 氏（国土館大学）ほか

1982～85年に沖縄県那覇市首里の園比屋武御嶽石門にシリコン樹脂溶液（SS-101）とアクリル樹脂（パラロイドB-72）の混合液を用いて保存・修復処置を行った。25年後の2010年に現地調査を行い経年変化を観察したところ、処置1年後と変わらぬ保存状態であった。

O-03「野蒜築港遺構群から採取した明治初期のセメント効果体の科学的評価」

沢木大介 氏（株太平洋コンサルタント）ほか

明治初期のセメントに対して電子顕微鏡、電子線マイクロアナライザー、偏光顕微鏡を用いた科学的な分析を行った。セメント産業黎明期のセメントの科学組成や粒度などの基礎的研究を報告された。

O-09「被災現場における緊急避難措置としての脱酸素処理法の評価」

杉山智昭 氏（北海道開拓記念館）ほか

震災による水損資料に対し、プラスチック製汎

用コンテナを使用した糸状菌への緊急処置の試みが示された。コンテナに試料と脱酸素剤を入れ、蓋と接する面にシーラントを塗布して内部の酸素濃度を0.1%以下にすることにより、糸状菌が抑制された。

〈ポスターセッション〉

P-59「漆膜断面構造と下地鋳物混和剤の鋳物組成による中世漆器分類の試み」

武田昭子 氏（昭和女子大学）ほか

岩手県柳之御所遺跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、福岡県博多遺跡群から出土した中世漆器分析を行った。下地の混和剤に火山ガラスを含む資料の化学組成比を分析することが、中世漆器の製作地域推定に有効であることが示された。

7月1日（日）

口頭発表、ポスターセッションが行われた。口頭発表はセッションⅤ～Ⅷに分けられ、10件の発表があった。ポスターセッションでは61件の発表があり、60分の解説時間が設けられた。

〈口頭発表〉

O-16「X線CT（3D-CT）による文化財健康診断システムの構築」

今津節生 氏（九州国立博物館）ほか

長崎市聖福寺所蔵の仏像を事例として挙げ、透過X線、X線CTを用いることが文化財の観察、調査に有効であることを報告された。

O-19「文書に接着されたセロハンテープの除去について」

岡 泰央 氏（岡墨光堂）ほか

紙資料に用いられたセロハンテープの除去方法として、温度、風量の調節が容易なエアペンシル（窒素使用タイプ）を用いた除去方法の発表が行われた。セロハンテープの粘着剤を温風加熱により本紙から除去する方法、粘着剤が本紙に残った部分に対し新しいセロハンテープを用いた「取りモチ」方式による除去方法が有効であることを発表された。

*発表要旨集は図書室に収蔵する。

b 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

期 日：7月5日（木）～7月6日（金）

会 場：三重県伊勢市吹上1-11-31

伊勢シティホテル

開催機関：三重県埋蔵文化財センター

参加者：所 長 坂本 均

総務部総務課長 葛西宏昭

内 容：7月5日（木）は伊勢シティホテルで会議・講演、7月6日（金）は高倉山古墳ほかの視察を行った。

7月5日（木）

〈議 事〉

①平成23年度事業報告について

事務局(檀原考古学研究所)から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への陳情活動、発掘された日本列島展への協力について説明・報告があり了承した。

②平成23年度収支決算・監査報告について

事務局から説明・報告があり了承した。

③平成24年度事業計画について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への陳情活動、発掘された日本列島展への協力、新規加盟組織の勧誘について説明・報告があり了承した。また、研修会テーマについては、幹事機関の北上市立埋文センターから報告があった要領に変更となった。

④平成24年度収支予算案について

事務局から説明・報告があり了承した。また、前会長機関である山梨県から、23年度にかかる支出で一部未払いがあったので、24年度予算で執行する旨の説明があり了承した。

⑤入退会について

24年3月30日付けで兵庫県立考古博物館から退会届の提出があり、受理について了承した。

⑥新規加盟組織の勧誘について

事務局から説明・報告があり了承した。

⑦平成25年度総会・研修会開催地について

総会・第1回役員会開催幹事機関は神戸市、研修会開催幹事機関は京都市、第2回役員会開催機関は、予定していた兵庫県立考古博物館が退会したため、同ブロックから推薦を受けることとなった。

⑧発掘された日本列島展について

事務局から説明・報告があり了承した。

⑨その他

次期(平成25・26年度)会長機関は、予定していた兵庫県立考古博物館が退会したため、24年度秋の役員会(11月開催予定)で決定することとなった。

〈講 演〉

「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

榎田佳男氏(文化庁文化財部記念物課文化財調査官)

専門職員数の推移、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱、今後の埋蔵文化財発掘調査体制のあり方について話された。

〈特別講演〉

「纏向から伊勢・出雲へ」

黒田龍二 氏(神戸大学教授)

発掘された纏向遺跡の建物の解釈、文献史学・考古学・神道学・民俗学・民族学・建築史学、建物の復元(研究者により解釈の違い)、建築史学からの推定、文献からの検討。

7月6日(金)

〈視 察〉

8:30 ホテル出発(バス)

8:50 伊勢市指定 高倉山古墳視察

10:30 せんぐう会館

11:10 神宮徴古館・農業館・美術館

12:30 近鉄宇治山田駅 解散

c 第3回文化財写真研究会

期 日：7月6日(金)～7月7日(土)

会 場：奈良県奈良市二条町2丁目9-1

奈良文化財研究所

参加者：第1調査部第1調査課主任 吉田裕吏洋

内 容

7月6日(金)

〈研究会I〉

文化財写真の保存～ガイドライン制定のあらまし～

「文化財写真の保存に関するガイドライン」の概要と目的

吉田英明 氏(オリンパスイメージング株)

中村一郎 氏(奈良文化財研究所)

「文化財写真の保存に関するガイドライン」についての補足説明がなされた。このガイドラインの内容はデジタルカメラから記録メディア、その運用に至るまで多岐にわたり、今後のデジタルワークフロー構築の参考になる。また、このガイドラインに沿うことで文化財業界の足並みの統一にもつながる。デジタル業界の変化に伴い改訂を続けるとの説明もあった。

7月7日(土)

「カラービューイングフィルターキットの活用方法」

井本 昭 氏 (テクニカルアドバイザー)

印刷物の色評価用フィルターの使用方法について説明がなされた。コダック社製のカラービューイングフィルターの販売中止を受け、文化財写真研究会監修により開発されたフィルターキットでデジタル化に対応した製品となっている。印刷物の色補正指示の際の共通ツールとして有効である。
〈研究会Ⅱ〉

文化財写真の保存～デジタル化に伴う保存事例～
「出土遺物の写真資料保存(土器立面撮影の基本)」
井上直夫 氏 (奈良文化財研究所)

撮影方法についての発表。ダブルクリップの柄と錘を利用しての不安定な土器の立て方や、篋状の板を用いた土器の傾きを修正する方法についての教授がなされた。また、背景紙の背面の高さや前側の傾き、土器を置く位置による影響やライティングによる効果の違いについても実演を交えて説明された。デジタルカメラの場合、絞り込むことにより回折現象でかえってピントが合わなくなるので、ティルトレンズが有効であることも述べられた。

「ガラス乾板・銀塩フィルムのデジタル保存(写真資料のスキャニング)」

川瀬敏雄 氏 (株堀内カラー)

デジタル化が進むなかでフィルムスキャナーは開発の対象から外れ、供給とサポートは悪化している反面、過去の銀塩フィルムのデジタル化フォトCDなど過去の形式のデジタルデータのマイグレーションの要望が高まっているとの説明がなされた上で、株堀内カラーでのスキャニング作業の実情についての発表とスキャニング資料としてのフィルムの特徴について述べられた。

資料に適したスキャナーを用い、使用目的に適した画像サイズでのスキャニングが重要で、適切なデータ形式・色空間の重要性について述べられた。

フィルムスキャナーの衰退を見据えて、手持ちの銀塩資料の早期デジタル化の必要性についての提唱がなされた。

「文化財写真のデータベース保存」

中村一郎 氏 (奈良文化財研究所)

発掘調査経過記録写真の撮影・保管活用のデジタル化について、奈良文化財研究所での事例発表となった。デジタル化にあたり単にデジタルカメラに置き換えるのではなく、ワークフローすべて

をデジタル化しなければならないことが述べられた。

「デジタル画像のプリント出力保存」

佐々木香輔 氏 (奈良国立博物館)

奈良国立博物館でのプリント出力保存の事例発表となった。重要な被写体に関しては中性紙、その他はメーカー純正紙に顔料インクを使用したインクジェットプリンタでA4サイズ出力したプリントを、メタデータをプリントした封筒に入れて保存している。メタデータは、被写体・立会者・撮影者・使用カメラ・RAW現像ソフト・プリント用紙・使用プリンタとインクなど将来的な活用を期待したものとの説明がなされた。

画像実像を持たない、デジタル画像の保存形態としての有効性について述べられた。

今回の研究会で「文化財写真の保存に関するガイドライン」が発表されたことにより、デジタルワークフローの方向性が見えてきた。当財団においても、調査部内で写真業務のデジタル化の方向性について総意を得て、次年度にデジタルスチルカメラ導入を目標としているが、ガイドラインに即した機種選定を行いたいと考える。また、今回の事例発表から、当財団所有のフィルムスキャナーやデジタルフォトプリンターを含むカラーマネジメントシステムの有効性が立証される結果となった。

今後は現在行っている銀塩からのデジタル化と共に、現有機器を最大限利用した、デジタルスチルカメラ撮影のワークフローの構築を行ってまいりたい。

d 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会

期 日：11月8日(木)～11月9日(金)

会 場：岩手県北上市川岸1-14-1

ホテルシティプラザ北上

参加者：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

内 容：11月8日(木)は、ホテルシティプラザ北上で研修を行った。11月9日(金)は、北上市内の関連施設視察及び史跡国見山廃寺跡の見学、平泉町に移動して平泉文化遺産センター・無量光院跡発掘調査現場を見学した。

〈特別講演〉

「寺院資財帳からからみた古代山林寺院」

上原真人 氏 (京都大学大学院教授)

寺院の中には何があり、それらを使って何をしていたのか、具体的な同時代資料から検討する方法として、寺院資財帳を利用した研究成果に基づく講演が行われた。

古代の山寺では、基本財産や固定資産に関しては、保有する建物施設や仏像に比較的明確な寺格差が認められるが、経典には寺格以外の要素が作用することがうかがえる。寺領は宗教活動の成果であり、施入者の多寡や性格に左右され、必ずしも寺格を素直に反映しないことが判明している。

〈事例報告〉

「山林寺院の調査」

松村知也 氏（福井市立郷土歴史博物館）

越前における古代から中世までの山林寺院遺跡調査事例の紹介と縄張り図（略測図）調査における新機種を利用した調査法について、報告があった。

古代越前における山林寺院遺跡は、立地に注目した場合、視界の開けた眺望の利く場所に存在することが多く、信仰の対象とされた山の山容を望む場所を志向している事例が多くみられる。縄張り図作成には、レーザーレンジファインダや携帯型地図表示機能付GPSを活用すると、作図や情報管理に利便性が高い。

「中寺廃寺跡の発掘調査」

中村文枝 氏（まんのう町生涯学習文化課中寺廃寺発掘調査室）

国指定史跡中寺廃寺跡の発掘調査と史跡整備状況について報告があった。中寺廃寺跡は、高所にある山林寺院遺跡ながら香川県全域が平均的に開けているという土地柄が幸いして、発見、発掘調査を行うことができた。今後の課題として、全国的な古代山林寺院遺跡調査データの中での位置づけ、11世紀以降の急激な衰退理由の解明が残されている。

「国見山廃寺跡の発掘調査」

杉本 良 氏（北上市立埋蔵文化財センター主任）

国指定史跡国見山廃寺跡の発掘調査による知見について報告があった。国見山廃寺の成立には、胆沢城における国家仏教儀式が大きく関連する。10世紀以降の安倍氏による多数の堂塔建築は、山林寺院の発展というよりは、支配地域の本寺として整備されたと考えるのが妥当。藤原清衡の時期、平泉（柳之御所）に中心府が移り、その隣接地に中心寺院と考えられる中尊寺が建立されると、国

見山廃寺は急速に衰退する。

〈特別報告〉

「東日本大震災後の埋蔵文化財1—復興の現状と課題—」

菅 常久 氏（岩手県教育委員会生涯学習文化課文化財専門員）

岩手県における復興事業に関わる埋蔵文化財調査の現状と課題について、報告があった。極度に切迫した状況での調査が続いている。中には、重要な遺構、遺物を発見した例もあり、記録保存をどこまで行っていけるか、迅速、正確、かつ的確な判断と対応が常に求められている。

「東日本大震災後の埋蔵文化財2—大船渡市での復興支援—」

岩田孝之 氏（大船渡市教育委員会生涯学習課/北上市から派遣）

大船渡市における復興事業に関わる埋蔵文化財調査の現状と課題について、報告があった。上記菅氏の報告同様、非常に厳しい環境の中で調査をすすめていることが説明された。その中で野田中学校の生徒が体験発掘を行うという普及教育的な活動も少ないながら実施されている例が紹介された。

〈視察見学〉

北上市立埋蔵文化財センターでは施設見学、北上市立博物館では国指定史跡国見山廃寺跡関連の資料見学を行った。国見山廃寺跡では、史跡整備エリアを踏査し、国見山山頂まで登った。平泉文化遺産センターでは、世界遺産平泉に関連する資料見学。無量光院跡では、史跡整備発掘調査中の現場を見学した。

e 平成24年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会 北海道・東北ブロック会議

期 日：11月29日（木）～11月30日（金）

会 場：宮城県多賀城市中央2丁目27-1

多賀城市文化センター

参加者：副所長 中田 仁

総務部総務課参与 前田 博

第1調査部第1調査課主任 吉田裕吏洋

内 容

11月29日（木）

〈東日本大震災関連の事例発表〉

「貞観11年陸奥国巨大地震の被害とその復興」

柳沢和明 氏（東北歴史博物館上席主任研究員）

貞観11年の大地震を『日本三代実録』や過去の埋蔵文化財調査の事例研究により解明出来た事についての発表となった。『日本三代実録』の記載事項と遺跡の分布から貞観津波の浸水域の推測をしている。災害考古学として過去の災害の研究の重要性と情報発信の必要性について述べられた。

「東松島市宮戸島の震災履歴」

菅原弘樹 氏（東松島縄文村歴史資料館館長）

里浜貝塚と宝浜貝塚の調査成果を中心に、宮戸島における巨大災害の履歴についての概略が述べられた。調査により推定される縄文時代後期の洪水・貞観11年の洪水と東日本大震災による浸水域の一致性について挙げられた。

洪水による被害だけではなく土砂災害についての研究が、今後の住民の高台移転に伴い重要になることも述べられた。

「多賀城市の文化財レスキュー活動について」

高倉敏明 氏（多賀城市埋蔵文化財センター文化財専門員）

市内の被害状況と文化財の被害状況、文化財レスキュー活動の体制と内容、活動の成果と今後の課題について市内に多く存在する倉の事例を中心とした発表となった。

地域に残る各種の文化財は、その土地の記録を示す大切な歴史遺産であり、被災を受けた文化財の保全活動は重要な仕事であるとまとめられた。

また、大規模な災害では市町村単独での活動は困難であり、地域を超えた自治体の応援が必要であり連帯強化を図るつながりも持つことの大切さについて述べ、友好都市や姉妹都市などの自治体連携が支援の対象として重要な基準となることも加えられた。

〈協議事項〉

①平成25年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議開催

次年度開催予定機関である釧路市埋蔵文化財センターの了承を得、承認された。

②平成25・26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック幹事機関

現幹事から推薦された札幌市埋蔵文化財センターと秋田県埋蔵文化財センターの了承を得、承認された。代表幹事については推薦された機関で話し合い決定することとなった。

また、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

の役員ローテーションで平成27・28年度は北海道・東北ブロックが会長にあたることから幹事機関については準備期間の必要性から前々年度に決めてはとの提案がなされ、次年度のブロック会議での協議事項とする確認もなされた。

〈照会事項〉

①発掘調査における写真機材について

（照会機関：札幌市埋蔵文化財センター）

②一眼レフデジタルカメラについて

（照会機関：秋田県埋蔵文化財センター）

③調査・研究員、発掘作業員・整理事業員の賃金について

（照会機関：秋田県埋蔵文化財センター）

④職員の技術向上について

（照会機関：秋田県埋蔵文化財センター）

⑤積算基準について

（照会機関：秋田県埋蔵文化財センター）

⑥被災地の発掘調査の資料整理・報告書刊行の支援について

（照会機関：盛岡市遺跡の学び館）

今回一番議論がなされた①②に関してまとめる。

写真機材のデジタル化に関しての質疑応答に多くの時間が割かれ、各機関の関心の高さが示される結果となった。

多くの機関が銀塩カメラの補助としてデジタル一眼レフカメラ・コンパクトデジタルカメラを導入、活用している。現時点では備品として購入している機関、リースしている機関と様々である。

現時点でデジタル化を予定していない機関は釧路市埋蔵文化財調査センター・奥州市埋蔵文化財調査センター・北上市埋蔵文化財センターの3機関で、釧路市埋蔵文化財調査センターからは発掘調査がないため導入の理由がたたないと口頭説明が付け加えられた。各機関とも導入予定はないが必要性を感じているとの意見も出た。

デジタルカメラ中心の業務を行っているのが、盛岡市遺跡の学び館・二戸市埋蔵文化財センターの2機関である。銀塩での運用に対する将来的な不安からの切り替えであるが、現状の機材のスペックやデジタルでの運用方法に不安の意見も出た。多賀城市埋蔵文化財調査センターでは今年度導入、次年度からの本格運用となっている。

今後、機材や技術に関しての情報交流を密に行い、本格的なデジタル運用に備える必要性を感じた。

(3) 埋蔵文化財に関する調査研究

a 「保管遺物の材質、原産地等についての整理 3」

【調査研究計画】

指定管理者第1期においては保管遺物についての基礎的、一時的なデータの整理作業を行った。第2期においてはこのデータ整理を継続しつつ、新たな項目を追加し、情報を付加していくことを計画した。

今期は、遺物の保管、保存について重要な課題である素材・原材に着目し、材質分析及び原産地分析に関する情報収集、集成について行った。

【情報収集・集成】

今年度も、保管遺物に関わる分析データを内容毎に整理し、集成することから開始した。特に、石材や黒曜石に関する原産地分析のデータを優先して抜き出しを行った。

利用可能な分析データは(1)これまでに財団法人北海道埋蔵文化財センターまたは道立センターで行った分析のデータ、(2)財団センターが調査時に依頼、委託して行った分析のもの、(3)道立センターでの特別利用や資料貸出の際に行われた分析のものがある。

(1)(2)については刊行された報告書からデータを抜き出す作業を行い、継続中である。(3)については公表されてはいるが、対象が限られている場合が多く、情報提供をお願いしている。

【道立センター保管遺物利用の分析】

道立センターでの特別利用や資料貸出の際の分析で、石材、原産地に関わるものは、これまでにキウス5遺跡出土の玉類(北海道教育大学 菅原いよ氏・岡村聡氏)、千歳市美々3遺跡出土の石斧(斜里町知床博物館 合地信生氏)、千歳市美々4遺跡、美々2遺跡、キウス4遺跡などの出土黒曜石製遺物(明治大学文化財研究施設 杉原重夫氏、金成太郎氏)などの例がある。

【黒曜石原産地分析データの整理】

本年度も貸出、分析依頼のあった明治大学文化財研究施設より提供のあった調査結果を整理し、データ活用の方向性を考える材料としたい。

なお、黒曜石製遺物の原産地推定は、明治大学

文化財研究施設に設置されている「黒曜石原産地推定システム」で行った。推定結果については情報提供というかたちで協力をいただいた。

【チプニー1遺跡の石器原産地推定結果より】

今回測定したのは、北海道千歳市チプニー1遺跡(縄文時代早期～擦文文化期)から出土した黒曜石製遺物である。特に堅穴住居跡や土坑などの遺構から出土したものを抜き出した。測定した遺物は25点であり、原産地が判別できた遺物は23点であった。

原産地推定の結果は、赤井川地区赤井川系が13点(56.5%)と半数以上を占め、他に白滝地区赤石山系が5点(21.7%)、同地区十勝石沢系が1点、十勝地区上士幌・美蔓系Aが3点(13.0%)、置戸地区所山系が1点であった。

【チプニー2遺跡の石器原産地推定結果より】

今回測定したのは、北海道千歳市チプニー2遺跡(縄文時代中期後半・晩期)から出土した黒曜石製遺物である。特に堅穴住居跡や土坑などの遺構から出土したものやまとまって出土したものを抜き出した。測定した遺物は115点であり、原産地が判別できた遺物は102点である。

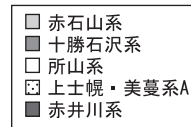
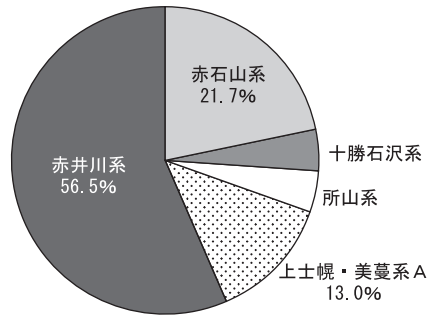
原産地推定の結果は、赤井川地区赤井川系が66点(64.7%)と半数以上を占め、白滝地区赤石山系が21点(20.6%)、同地区十勝石沢系が7点(6.9%)であった。その他、十勝地区上士幌・美蔓系Aが6点(5.9%)、置戸地区所山系が1点、豊浦地区豊浦系が1点認められた。

【今後の計画・目標】

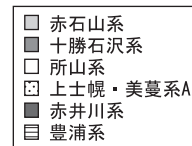
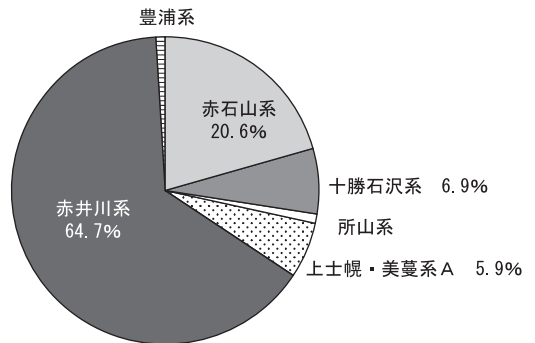
今後もデータを蓄積し、遺跡調査における分析の方針や意義、目的を考えるうえでの基礎資料となるようなかたちとしたいと考えている。各市町村における文化財保護事業においても有用なデータベースとしたい。

石器原産地推定結果

遺跡名	チブニー 1 遺跡	チブニー 2 遺跡
時代	縄文時代早期～ 擦文文化期	縄文時代中期 後半・晩期
測定点数	25	115
判別点数	23	102
赤石山系	5	21
十勝石沢系	1	7
所山系	1	1
上土幌 美蔓系A	3	6
赤井川系	13	66
豊浦系		1



チブニー 1 遺跡



チブニー 2 遺跡

(4) 分析・鑑定・保存処理等

a 分析・鑑定

※分析・鑑定結果は、下記の保存処理、道・市町村教育委員会支援の中で並行実施し、各教育委員会報告などに掲載。

b 保存処理

①重要文化財北海道美々8遺跡出土品の修理

対象：角棒状鉄（鉄・鍛造）

記録票番号1157

期間：平成25年2月12日～3月25日

場所：北海道立埋蔵文化財センター
保存処理室

担当者：第1調査部第1調査課長 田口 尚

修理方法の概略

劣化状況の肉眼・実体顕微鏡観察、保存処理前の写真撮影、X線透過撮影による亀裂の進行状況などの観察。剥落部などに認められるサビの除去と剥落箇所をエポキシ樹脂接着。高温高压脱塩装置によるBTA脱塩処理を実施し、十分に乾燥。パラロイドNAD10の減圧含浸により再強化。接着充填箇所はアクリル絵の具により修復を認識できる程度の古色付け。色調変化・収縮・変形を処理前写真や実測図などと比較観察し、保存修復後の記録作成・写真撮影。保存処理後の資料はエスカルフイルムに脱酸素剤を封入し保管。資料は温湿度管理された特別収蔵庫にて安全に保管・管理する。

(5) 道・市町村教育委員会支援など

a 指導・協力等

①北海道開拓記念館特別展協力(5/11～ 田口・高橋)。第69回特別展示「アンモナイト展」(7/6～10/3開催)にて真空凍結乾燥標本、展示資料作成協力、X線透視撮影、保存処理指導。

②第158回テーマ展「博物館資料の保存一木をのこす」(11/3～3/17 田口・高橋)の展示資料作成、各種保存処理法の指導・協力。

③金属製品及び木製品の遺存状態の検討及び指導(5/30 田口・高橋)。北海道大学医学部大学院医学研究科・先住民研究センター

④標津町伊茶仁チシネ1遺跡出土品の整備に係る指導について(7/25～27 田口)。出土漆塗り織

維製品クリーニング処理技術指導、カリカリウス遺跡出土編み組製品の保存処理対策指導、野付半島会津藩士の墓保存対策指導。

⑤上ノ国町「町内出土遺物保存処理事業」に係る職員派遣(9/12～14 田口)。木製品・金属製品・骨角器の復元及び重要文化財「北海道上之国勝山館跡出土品」の保存処理。当センターの保存処理済遺物及び特別収蔵庫等見学(11/2 田口)

⑥北海道指定有形文化財「平取町二風谷遺跡群出土品」の保存処理等に関する技術指導及び協力について(12/12～4/30 田口)。

金属製品のX線撮影(12/12～26)、漆器の保存処理・修復及び台座作成に関わる技術指導(12/12～4/30)

⑦池田町指定文化財(出土鉄製品)の保存処理について(12/14～ 田口)。池田3遺跡出土鉄製品の保存処理指導と支援。

⑧恵庭市ユカンボシE1遺跡出土金属製品、ガラス玉等の保存処理について(12/19～ 田口・高橋)。出土金属製品のX線撮影及び保存処理、出土ガラス玉の保存処理及び蛍光X線分析。

⑨石狩市いしかり砂丘の風資料館所蔵の出土金属製品の保存処理について(12/12～ 田口・高橋)。若生C遺跡出土金属製品の保存処理指導及び支援。

⑩北海道指定有形文化財「二風谷遺跡群出土品」及びアイヌ民族資料の収蔵保管環境に関する指導助言について(3/7～3/8 田口・高橋)

二風谷遺跡群出土品については現収蔵庫や展示室の環境を各種機器にて計測調査し指導。修復中の漆塗椀は類似するアイヌ民具と比較検討。アイヌ民具資料については、展示室や収蔵庫において病害虫による劣化の有無を確認し、燻蒸作業に先立って日常的な点検や温湿度記録が重要であることなど、問題点や注意点を指導・助言した。

b 埋蔵文化財担当職員現地研修会

「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群と近隣地域における出土資料の公開活用・普及活動」について」

目的：北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群のある12市町村は平成21年度から「縄文遺跡群世界遺産登録推進本部」を設置して、世界遺産登録



▲埋蔵文化財担当職員現地研修会講義

に向けた事業を共同で推進している。

今回の研修では縄文遺跡群の世界遺産登録への取り組みの現状を概観し、これらの縄文遺跡群の中でも史跡北黄金貝塚と史跡入江・高砂貝塚の調査と史跡整備・世界遺産登録への取り組みの実際について学ぶ。

また、登別市における出土資料の公開活用や普及活動の実際について研修する。

講師

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

文化財調査グループ主幹 長沼 孝 氏

伊達市噴火湾文化研究所文化課

文化財係長・学芸員 青野友哉 氏

洞爺湖町教育委員会社会教育課

社会教育グループ主査 角田隆志 氏

登別市教育委員会

社会教育グループ学芸員 菅野修広 氏

日時：平成24年9月6日（木）

会場：登別市文化交流館カント・レラ

内容

研修1

「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群世界遺産登録への取り組み」

（講師：長沼 孝 氏）

北海道教育委員会による北海道・北東北を中心とした縄文遺跡世界遺産登録への取り組みについて研修を行った。

研修2

「史跡北黄金貝塚」

（講師：青野友哉 氏）



▲埋蔵文化財担当職員現地研修会施設見学

伊達市北黄金貝塚の調査、史跡整備・世界遺産登録への取り組みについて研修を行った。

研修3

「史跡入江・高砂貝塚」

（講師：角田隆志 氏）

洞爺湖町入江貝塚・高砂貝塚の調査、史跡整備・世界遺産登録への取り組みについて研修を行った。

研修4

「登別市内の遺跡調査と出土資料の公開活用・普及活動およびカント・レラ施設見学」

（講師：菅野修広 氏）

登別市内の遺跡調査と出土資料の公開活用や普及活動について研修した。あわせてカント・レラ施設見学を行った。

日程

9：15 受付・オリエンテーション

9：30 研修1

10：30 研修2

12：00 昼食

13：00 研修3

14：30 休憩

14：40 研修4

16：10 質疑応答

16：30 研修終了・修了式

参加者：市町村職員など10名、センター職員16名

（*現地研修会という性格上講師も含む）

現地研修会参加者一覧（センター職員を除く）

	氏名	振興局	所属
講師	長沼孝		北海道教育委員会
講師	青野友哉	胆振	伊達市教育委員会
講師	角田隆志	胆振	洞爺湖町教育委員会
講師	菅野修宏	胆振	登別市教育委員会
1	福田裕二	渡島	函館市教育委員会
2	吉田好克	渡島	森町教育委員会
3	宮本雅通	檜山	今金町教育委員会
4	小川康和	後志	余市町教育委員会
5	平塚理子	胆振	登別市教育委員会
6	赤石慎三	胆振	苫小牧市博物館

c 埋蔵文化財担当職員研修会

「石器分類の実際 旧石器1」

目的：発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、①北海道旧石器研究の現状と課題、②石器群の変遷、③旧石器資料の発掘調査から整理・報告まで、について専門的な研修を行う。

講師

今金町教育委員会事務局次長 寺崎康史 氏
 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
 第1調査部第4調査課主任 直江康雄
 第1調査部第4調査課主査 坂本尚史

日時：平成24年12月21日（金）

会場：北海道立埋蔵文化財センター2階研修室

内容

研修1

「北海道旧石器研究の現状と課題 学史編」

（講師：寺崎康史 氏）

北海道の旧石器研究における現状と課題について、学史、石器群の変遷をたどりながら、総括的に解説した。

研修2

「石器群の変遷 前半期」



▲埋蔵文化財担当職員研修会

（講師：直江康雄）

細石刃石器群以前の旧石器時代の石器群について、その変遷を解説した。

研修3

「旧石器時代遺跡の調査と整理の方法」

（講師：坂本尚史）

遠軽町白滝遺跡群の事例を中心に、旧石器時代の発掘調査から整理・報告書作成までの留意点について解説した。

日程

9：30 受付開始

9：50 オリエンテーション

10：00 研修1

11：30 昼食

13：00 研修2

14：30 休憩

14：40 研修3

16：50～17：10 質疑応答

参加者：市町村職員など24名、センター職員20名

研修会参加者一覧（センター職員を除く）

	氏名	振興局	所属		氏名	振興局	所属
1	田中亮	石狩	札幌市教育委員会	13	大谷茂之	渡島	八雲町教育委員会
2	榊田朋広	石狩	札幌市教育委員会	14	塚田直哉	檜山	上ノ国町教育委員会
3	高橋祐	石狩	札幌市教育委員会	15	高畠孝宗	宗谷	枝幸町教育委員会
4	石神敏	後志	小樽市教育委員会	16	八重柏誠	オホーツク	美幌町教育委員会
5	小川康和	後志	余市町教育委員会	17	今西輝代	オホーツク	置戸町教育委員会
6	花田直彦	後志	余市町教育委員会	18	瀬下直人	オホーツク	遠軽町教育委員会
7	遠藤むつみ	後志	余市町教育委員会	19	林勇介	オホーツク	湧別町教育委員会
8	野村祐一	渡島	函館市教育委員会	20	友田哲弘	上川	旭川市教育委員会
9	坪井睦美	渡島	NPO法人函館市埋蔵文化財事業団	21	澤田健	上川	富良野教育委員会
10	山田央	渡島	七飯町教育委員会	22	赤石慎三	胆振	苫小牧市教育委員会
11	竹田聡	渡島	知内町教育委員会	23	大橋毅	十勝	芽室町教育委員会
12	木元豊	渡島	木古内町教育委員会	24	坪岡始	釧路	標茶町教育委員会

5 収蔵・保管事業の概要

(1) 収蔵資料目録

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育庁・出納局長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。今年度は新たに江別市対雁2遺跡、千歳市キウス5遺跡、祝梅川小野遺跡、梅川1遺跡、祝梅川上田遺跡出土の資料を収蔵した。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物コ ンテナ数	その他コ ンテナ数	復元土器 個体数		
1	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報	7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報	8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報	9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報	35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報	36	昭和61	1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報	44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報	86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報	89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報	100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報	103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報	104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報	105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報	113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報	114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報	115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報	116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報	117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報	119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報	124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報	125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159
58	北埋調報	126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1
59	北埋調報	127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5
60	北埋調報	128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81
61	北埋調報	133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63
62	北埋調報	134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I地区	千歳市	キウス4	42	302	234

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コナテナ数	その他コ ナテナ数	復元土器 個体数	
62	北埋調報 134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I 地区	千歳市	キウス4	42	302	234
63	北埋調報 135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A 2地区	千歳市	キウス4	5	39	14
64	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0
65	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0
66	北埋調報 138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0
67	北埋調報 144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40
68	北埋調報 146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14
69	北埋調報 147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14
70	北埋調報 148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2
71	北埋調報 152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45
72	北埋調報 157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380
73	北埋調報 159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69
80	北埋調報 178	平成14	2002	西島松5遺跡	恵庭市	西島松5	68	218	97
81	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1623	696
82	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0
83	北埋調報 188	平成14	2002	オルイカ1遺跡	千歳市	オルイカ1	2	32	2
84	北埋調報 189	平成14	2002	オルイカ2遺跡	千歳市	オルイカ2	5	17	4
85	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0
86	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36
87	北埋調報 194	平成15	2003	西島松5遺跡(2)	恵庭市	西島松5	7	21	19
88	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11
89	北埋調報 206	平成15	2003	オルイカ1遺跡(2)	千歳市	オルイカ1	1	2	2
90	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12
91	北埋調報 209	平成16	2004	西島松5遺跡(3)	恵庭市	西島松5	55	455	467
92	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0
93	北埋調報 221	平成17	2005	オルイカ2遺跡(2)	千歳市	オルイカ2	23	34	10
94	北埋調報 224	平成18	2006	西島松5遺跡(4)	恵庭市	西島松5	10	27	22
95	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27
96	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41
97	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429
98	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6
99	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4
100	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22
101	北埋調報 248	平成20	2008	西島松3・5遺跡(5)	恵庭市	西島松5	33	486	140
102	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10
103	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181
104	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51
105	北埋調報 255	平成19	2007	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4
106	北埋調報 260	平成21	2009	西島松5遺跡(6)	恵庭市	西島松5	39	53	11
107	北埋調報 265	平成21	2009	西島松2遺跡	恵庭市	西島松2	93	437	168
108	北埋調報 267	平成21	2009	オルイカ2遺跡(3)	千歳市	オルイカ2	3	6	53
109	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー7	3	10	3
110	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー9	8	1	0
111	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20
112	北埋調報 284	平成23	2011	キウス5遺跡(9)	千歳市	キウス5	5	22	134
113	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	祝梅川小野	31	180	81
114	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	梅川1		2	2
115	北埋調報 296	平成24	2012	対雁2遺跡(11)	江別市	対雁2	18	85	101
116	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	祝梅川小野	7		54
117	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	梅川1	1	27	3
118	北埋調報 299	平成24	2012	キウス5遺跡(10)	千歳市	キウス5	30	112	56
119	北埋調報 300	平成24	2012	祝梅川上田遺跡(2)	千歳市	祝梅川上田	5	30	13
(道教委・道埋文センター発掘調査分)					合	計	1200	9390	6173
1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23
(保護協会発掘調査分)					合	計	57	301	85
総					合	計	1257	9691	6258

6 普及・啓発事業の概要

(1) 展示活動

a 常設展示「掘り出された北の歴史」

展示にあたっては、国（文化庁）・七飯町・北斗市・今金町・木古内町・余市町・夕張市・長沼町・遠軽町の各教育委員会、知内町郷土資料館、芦別市星の降る里百年記念館に、展示品借用についての協力を得た。

また、企画展示との関係から、展示室とホールを併用して展示を行っている。

〔千歳市ママチ遺跡出土土面展示〕

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は、縄文時代晩期終末のもので、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した。土面としては最も北方から出土したものである。

〔遺跡調査と保護活用〕

北海道の遺跡分布、遺跡の調査や整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについて展示・解説している。また、国宝や国指定重要文化財の複製品も展示している。

〔石の道具〕

石は人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかになっている。遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示した。

また、縄文時代には用途に応じて、それに適した石材を選び、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

〔木の道具〕

木の道具は、通常の遺跡では腐ってしまい残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため、低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、当時の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。

千歳市美々8遺跡低湿部のアイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の丸木舟を展示して



▲常設展示1

いる。展示品は保存処理後の遺物である。

千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定された。その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。

〔金属の道具〕

金属の道具は、人類が新しく手にしたものの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、これら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。

金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

〔土の道具：土と火の造形〕

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器の使用により、食材の利用範囲が大きく拡大して、縄文時代の生活の安定がもたらされたと考えられている。

土器には自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々な変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。

〔こころの道具〕

「装いとこころ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製、コハク製などの各種玉、玦状耳飾り、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれごころや精神生活の一端をみせてくれる。

「墓と副葬品」：墓の副葬品は、当時の生活用具



▲常設展示2

をセットでみせてくれるとともに、当時の人々の「死」に対する恐れ、悲しみなど、「こころ」の一面をのぞかせてくれる。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現された動物たちに、何を感じ、何を求めているのか、当時の人々の自然と向き合う生活の一端を考えさせられる。

【キウスの縄文村】

千歳市キウス4遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマで復元した。また、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器や土製品、玉類、土偶などがある。

【ビデオコーナー】

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

【体験コーナー】

火おこし体験コーナー：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式、まいぎり式による火おこし体験ができる。

土器コーナー：土器拓本体験ができる。煮炊きに使った復元土器を展示している。

石器コーナー：石器を使ったドングリの皮むき、石器の接合、石器の紙切り体験ができる。石器の材料となる石材見本を展示している。

常設展示点数一覧

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物 点数	パネル・レプリカなど	合計 点数	
ホール・展示回廊		52	33	85	
常設展示室	受付・導入部分	4	6	10	
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	5	89	94
		遺物の保存と分析	2	120	122
	「石の道具」部分	旧石器時代の石器	141	12	153
		縄文時代の石器	130	15	145
	「木の道具」部分	縄文時代の木製品	7	17	24
		アイヌ文化期の木製品	33	50	83
	「金属の道具」部分	14	3	17	
	「骨の道具」部分	3	3	6	
	「土の道具」部分	264	24	288	
	「こころの道具」部分	装いとこころ	956	20	976
動物とひと		13	14	27	
「キウスの縄文ムラ」部分	4	5	9		
「新しい時代へ」	17	2	19		
屋外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1820	1820	
合 計		1645	2234	3879	

b 企画展示

①「縄文人に挑戦

一見る、触れる、つくる、縄文生活体験ひろば」展
 会 期：平成24年6月30日(土)～10月14日(日)
 目 的：体験学習を通して考古学の成果をわかりやすく紹介する特別展示で、縄文時代の生活を具体的に紹介し、勾玉づくりや土器づくり、石器使

用などの体験を通して、埋蔵文化財をより身近なものとして体感できる場とする。

展示場所：ホール・常設展示室・体験コーナー

【展示内容】

【縄文工房】(ホール)

実物を観察し、「カタログ」や「レシピ(つくりかた手順)」を参考にして自分で素材や道具を



▲縄文生活体験ひろば展1

選び、縄文アクセサリーや土器・土製品をつくる体験ができる。主に以下の内容で製作体験ができる

縄文ネックレスに挑戦：いろいろな種類の玉をつくり、組み合わせて腕輪やネックレスにする。

勾玉をつくる：滑石を磨いてミニチュア勾玉をつくる。

丸玉・管玉・白玉・小玉をつくる：滑石を磨いていろいろな種類の玉をつくる。

縄文ペンダントをつくる：滑石を磨いてペンダント（垂飾）をつくる。

土製の玉をつくる：粘土を使って土製玉をつくる。

耳飾りに挑戦：粘土や滑石を用いて耳飾り、スタンプ形の飾りをつくる。

土製耳飾り・耳栓をつくる：粘土を使って、土製の耳飾りをつくる。

球状耳飾りをつくる：滑石を磨いて球状耳飾りをつくる。

土面・土偶をつくる：土面や土偶を展示室の実物を手本に粘土でつくる体験。

ミニチュア土器をつくる：ミニチュア土器を粘土でつくる体験

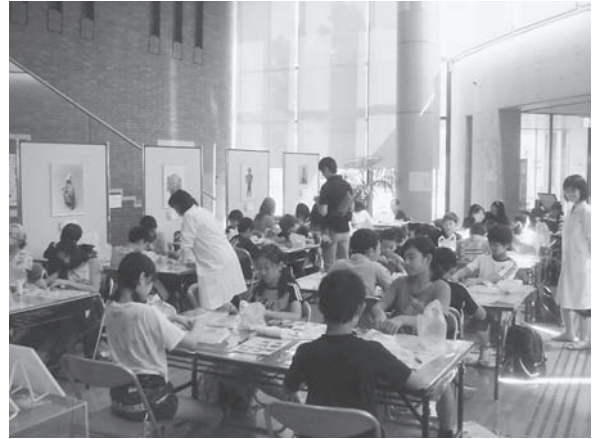
布を編む：復元された縄文時代の方法で布を編む体験。

【体感教室】（展示廊下から体験コーナー、常設展示室）

土器や石器等、縄文時代の各時期の遺物を揃え、触れて観察する場をつくる。また、レプリカを使って道具の使用法を体験する。

じょうもんタッチ：土器や石器に触れて観察する。

縄文模様図鑑をつくる：本物の縄文土器から模様



▲縄文生活体験ひろば展2

を写しとる「拓本」に挑戦する。

火おこし：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式での火おこし体験。

砂絵で土器を描こう：砂絵でいろいろな種類の土器を描きます。

石器を使う：ナイフで紙や皮を切り、たたき石で木の実をすりつぶすなどの体験

〔展示企画〕 藤井 浩

②北海道遺跡百選 5

「北海道遺跡空中散歩

—空から遺跡を見てみよう—展

会 期：平成24年10月27日（土）

～平成25年3月3日（日）

展示のねらい：「北海道遺跡百選」は、「遺跡との出会い」をテーマに北海道の代表的な遺跡を紹介するもので、5回目の今回は、空中写真を通して道内各地で調査された遺跡の姿、発掘の様子などを紹介した。

遺跡を知るうえで、周辺環境についての理解は欠かすことができない。特に遺跡の性格や範囲などを考えるためには、空中写真は重要な手がかり、環境情報の宝庫といえる。当時の人々が、自らの生活する土地をいかに意識し、どのように利用しようとしたかを写真のなかに垣間見ることができる。

当センターでは、調査に伴って撮影された膨大な写真資料を所蔵している。その中からの選りぬきのコレクションを、空中散歩を楽しむ感覚でご覧いただきたい。



▲北海道遺跡百選 5



▲平成23年度発掘調査成果展（展示室）

[展示内容]

1 北海道遺跡空中散歩

i 渡島半島の遺跡群を飛ぶ

福島町～函館～八雲・長万部の遺跡群

ii 石狩低地帯の遺跡群を飛ぶ

苫小牧～千歳～恵庭～江別の遺跡群

iii 川と海の遺跡群を飛ぶ

遠軽町白滝遺跡群、芦別市滝里遺跡群、根室市穂香竪穴群

iv 周堤墓を飛ぶ

斜里、芦別の遺跡群

[展示企画] 藤井 浩

③財団法人北海道埋蔵文化財センター

平成23年度発掘調査成果展

会 期：平成24年 3月31日（土）～6月10日（日）

展示のねらい：財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成23年度に実施した発掘調査成果について、出土した遺物や写真、パネルなどにより紹介した。

展示場所：常設展示室・ホール

[展示内容]

【遺物とパネル等で紹介】

（展示室）

江別市対雁2遺跡：縄文時代晩期土器、石斧集中、石製品。

長沼町南六号川左岸遺跡：縄文時代土器・石器。

木古内町札苺5遺跡：旧石器、縄文時代土器（前期～晩期）、石器。

木古内町札苺6遺跡：縄文時代大珠、土偶、土製品。

北斗市押上1遺跡：縄文時代ヒスイ玉、青竜刀形石器。

木古内町大平遺跡：縄文時代円筒下層式土器、土製品、石製品。



平成23年度 発掘調査遺跡位置図



▲平成23年度発掘調査成果展（ホール）



▲平成23年度発掘調査成果展（ホール）

木古内町木古内2遺跡：縄文時代円筒下層式土器、後期土器。

根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群：縄文時代前期土器、オホーツク式土器、動物遺存体（オホーツク文化期）。

（ホール）

福島町館崎遺跡：縄文時代円筒下層式土器、縄文時代円筒上層式土器、縄文時代前期岩偶。

【説明パネル・写真パネルで説明】

（展示室）

長沼町幌内D遺跡、木古内町木古内遺跡、釜谷8遺跡、蛇内2遺跡、北斗市当別川左岸遺跡、更別村香川遺跡、下川町北町J遺跡、富良野市中五区1・2・3遺跡

〔展示企画〕 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部

④世界遺産をめざす北の縄文展

会 期：通年

（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

展示のねらい：北海道は北東北3県と連携して「北の縄文文化回廊づくり」や遺跡群の世界文化遺産登録へ向けての取り組みを行っている。

北海道立埋蔵文化財センターはこれに連携して、世界遺産登録をめざす北海道・北東北3県の縄文遺跡群についての展示を行い、広く道民や道外からの観光客に情報発信する。

これにより、北海道の歴史的風土の理解を図るとともに、世界文化遺産登録推進の取り組みへの



▲世界遺産めざす北の縄文展

理解を深めていただく。

展示場所：アプローチ南側

〔展示内容〕

【常 設】

「開催にあたって」「津軽海峡と縄文文化」「北日本文化圏」「世界遺産登録をめざして」など。

【展示遺跡】

北海道：キウス周堤墓群、北黄金貝塚、入江・高砂貝塚、鷺ノ木遺跡、大船遺跡、垣ノ島遺跡

青森県：三内丸山遺跡、小牧野遺跡、是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚、二ツ森貝塚、大平山元I遺跡、大森勝山遺跡

岩手県：御所野遺跡

秋田県：大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡など

*展示遺跡・展示物品は随時更新する。また、各道県の動向の紹介、イベントなどの案内を行う。

〔展示企画〕 倉橋直孝

(2) 資料の特別利用等

a 特別利用一覧

番号	利 用 者	使用目的	利 用 資 料 名	備 考
1	横山英介	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土石器	
2	加曾利貝塚土器づくり同好会会長 大儀 満	資料調査	千歳市梅川4遺跡・キウス4遺跡・キウス5遺跡・キウス7遺跡・ママチ遺跡・美々4遺跡出土土器	
3	北海道開拓記念館 添田雄二	資料調査	千歳市美々4遺跡出土アンモナイト	
4	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器	
5	明治大学博物館 島田和高	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土石器	
6	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器	
7	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所企画調整部 文化財情報研究室 室長 森本 晋	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土石器	
8	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器	
9	東北大学植物園	資料調査	キウス4遺跡他出土編物製品	
10	東北大学大学院文学研究科考古学研究室 鹿又喜隆	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土石器	
11	明治大学 尾崎沙羅	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土石器	
12	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器接合資料	
13	アバディーン大学 ケヴィン・ギブス	資料調査	根室市トーサムボロ湖周辺堅穴群出土土器、福島町館崎遺跡出土土器	
14	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器接合資料	
15	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器接合資料	
16	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器接合資料	
17	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	資料調査	遠軽町白滝遺跡群出土石器接合資料	
18	東北大学大学院文学研究科考古学教室 鹿又喜隆	資料調査	千歳市柏台1遺跡・オルイカ2遺跡・オサツ16遺跡出土資料	
19	朝鮮大学校史学科考古学教授 李 起吉	資料調査	千歳市柏台1遺跡・オルイカ2遺跡・オサツ16遺跡出土資料	
20	北海道大学医学研究科博士研究員 中沢祐一	資料調査	千歳市柏台1遺跡出土資料	
21	北海道大学埋蔵文化財調査室 坂口 隆	資料調査	芦別市矢野沢遺跡出土資料（重要遺跡確認調査参考資料）	
22	石狩市教育委員会 荒山千恵	資料調査	千歳市キウス4遺跡出土資料	
23	厚真町教育委員会 服部一雄	資料調査	千歳市キウス4遺跡出土資料	
24	明治大学 尾崎沙羅	資料調査	千歳市柏台1遺跡・アンカリトー7遺跡、遠軽町旧白滝3遺跡出土資料	

b 模写品等使用承認一覧

番号	申 請 者	使 用 目 的	利 用 資 料 名 ・ 点 数	備 考
1	坂口 隆	『考古学雑誌』投稿論文に使用	恵庭市西島松5遺跡出土注口土器ほか 写真撮影2点 写真デジタルデータ1点	
2	北海道立北方民族博物館 館長 岡田淳子	北方民族博物館ロビー展「北方民族素材シリーズ1：目からうろこの魚皮ワールド」展示に使用	千歳市キウス5遺跡出土楕状木製品写真 写真デジタルデータ1点	
3	宮 宏明	「特異な底部を有する土器について―北の土器と南の土器―」『考古学雑誌』に使用	江別市吉井の沢1遺跡出土土器写真 写真撮影2点 写真デジタルデータ1点	
4	原子 修	詩劇「縄文の花」公演に使用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ1点	
5	特定非営利活動法人 ジョーモネスクジャパン事務局 理事長 小林達雄	特定非営利活動法人ジョーモネスクジャパン会報に使用	八雲町野田生1遺跡出土赤彩土器写真 写真デジタルデータ1点	
6	高倉 純	『RNMHシリーズNo.1』（科学研究費補助金新学術領域研究報告書）に使用	遠軽町旧白滝15遺跡出土接合資料写真 写真転載1点	
7	朝日新聞出版 分冊百科「日本の歴史」編集部 永塚英太郎	朝日新聞出版「日本の歴史」に使用	恵庭市西島松5遺跡出土直刀写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
8	室蘭市教育委員会生涯学習課 松田宏介	『室蘭民報』日曜版「縄文への旅」に使用	恵庭市柏木川4遺跡出土土製品土面写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
9	MIHO MUSEUM 館長 辻 惟雄	「土偶・コスモス展」に使用	千歳市美々4遺跡P-373出土土偶写真 写真撮影1点	
10	岩宿博物館 館長 小菅将夫	『岩宿人のくらしをさぐる学習シート』に使用	遠軽町黒曜石大露頭写真 写真デジタルデータ1点	
11	緑町福祉会 会長 斉藤安正	陸前高田市気仙沼小学校寄贈押し花葉に使用	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品写真 写真デジタルデータ1点	
12	有限会社バケット 阿曾淳史	『わかる！使える！流れてつかむ日本史』に使用	遠軽町白滝遺跡群出土尖頭器写真 写真デジタルデータ計2点	
13	宮 宏明	「特異な底部を有する土器について―北の縄文と南の土器―」『考古学雑誌』に使用	登別市川上B遺跡出土土器片写真ほか 写真デジタルデータ計3点	
14	明治大学博物館 館長 風間信隆	明治大学博物館特別展図録「氷河時代のヒト・環境・文化」に使用	千歳市柏台1遺跡出土石器・顔料原材 写真撮影計42点	
15	明治大学博物館 館長 風間信隆	明治大学e-learningコンテンツ「氷河時代のヒト・環境・文化」（仮題）製作に伴う展示状況、資料クローズアップの動画撮影およびweb等によるコンテンツ配信に使用	千歳市柏台1遺跡出土石器・顔料原材 写真撮影計42点	
16	(株)新泉社 代表取締役 石垣雅哉	井口直司「縄文土器ガイドブック」に使用	千歳市美々4遺跡出土堂林式土器写真 写真デジタルデータ1点	
17	株式会社 インテリジェントリンク 石田美恵	北の縄文文化を発信する会リーフレット・道民会議ウェブサイトを使用	ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ1点	
18	福島市教育委員会 教育長 佐藤俊市郎	福島市資料展示室秋季特別展展示パネルおよび広報用ポスター等に使用	千歳市美々4遺跡出土ヒスイ製品写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
19	秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室 室長 佐々木人美	「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の世界遺産登録に向けてのPR活動チラシに使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
20	千歳市教育委員会 教育長 小林義知	「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の世界遺産登録に向けてのPR活動チラシ・パネル等に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ計10点	
21	北海道開拓記念館 館長 堀 達也	第158回テーマ展に使用	千歳市美々8遺跡出土早稲写真ほか 写真撮影9点、写真デジタルデータ9点、計18点	
22	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 館長 小林和彦	企画展示図録などに使用	知内町湯の里5遺跡出土ストーンサークル写真ほか 写真デジタルデータ計3点	
23	國學院大學考古学研究室 小林達雄	小林達雄「縄文土器を読む」に使用	八雲町野田生1遺跡出土赤彩注口土器写真 写真デジタルデータ1点	
24	青森県立郷土館 館長 月館法弘	平成24年度企画展に使用	千歳市キウス4遺跡出土環状赤彩土器写真 写真デジタルデータ計2点	

番号	申請者	使用目的	利用資料名・点数	備考
25	株式会社インテリジェント・リンク 石田美恵	「北の縄文道民会議」ウェブサイトを使用	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
26	東奥日報社 報道部長 福井 透	『東奥日報』に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
27	みんなで、ひとまちづくり委員会 櫻庭寛之	講演会「キウス周堤墓群と私たち」ポスター・チラシなどに使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
28	田中哲郎	平成24年度沙流川歴史館講座講演に使用	平取町二風谷遺跡発掘等写真 写真デジタルデータ計24点	
29	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	『墓の社会的機能の考古学』に使用	千歳市美々4遺跡X-219写真ほか 写真デジタルデータ計6点	
30	田中陽子	『勾玉とたまふり』に使用	千歳市美々4遺跡出土玉類写真 写真デジタルデータ1点	
31	株式会社平凡社 取締役社長 下中直人	小川忠博『縄文美術館』に使用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真撮影計7点	
32	青森県教育庁文化財保護課 課長 岡田 康博	北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群を紹介するパネルに使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
33	一戸町教育委員会 教育長 遠藤 裕一	パネル展「御所野遺跡と縄文遺跡群の世界遺産登録について」に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
34	遠軽町教育委員会 教育長 河原 英男	遠軽町埋蔵文化財センター展示解説資料に使用	遠軽町白滝遺跡群「遺跡群と湧別川」写真ほか 写真デジタルデータ計3点	
35	一戸町教育委員会 教育長 遠藤 裕一	「いちのへ会議だより」第182号に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
36	株式会社吉川弘文館 編集部 矢島初穂	土生田純之「事典 墓の考古学」に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
37	株式会社インテリジェントリンク 石田美恵	北の縄文道民会議ウェブサイトを使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
38	八雲町郷土博物館 館長 城近 眞	『三訂 八雲町史』に使用	八雲町山崎5遺跡全景写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
39	千歳フェニックス会 芝 敬雄	『千歳フェニックス会（宮崎県人会）50周年記念パンフレット』に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
40	國學院大学考古学研究室 中村耕作	『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』に使用	八雲町野田生1遺跡赤彩注口土器出土状況写真 写真デジタルデータ1点	
41	千歳市企画部広報聴課 課長 林 伸一	『広報ちとせ』2013年2月号に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
42	秋田県教育庁 生涯学習課文化財保護室 室長 佐々木人美	世界遺産PR事業縄文遺跡群写真展パネルに使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
43	株式会社童心社 代表取締役社長 佐倉清一	設楽博巳「遺跡から調べよう！」に使用	遠軽町上白滝6遺跡の調査写真ほか 写真デジタルデータ計9点	
44	(株)太陽 月刊クオリティ 奥田誠吾	『月刊クオリティ3月号』に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
45	千歳市教育委員会 埋蔵文化財センター長 高橋 理	『ちとせの遺跡』に使用	千歳市ママチ遺跡A P310遺物出土状況写真ほか 写真デジタルデータ計61点	
46	千歳市教育委員会 教育長 宮崎 肇	千歳市教育委員会だより「からふる」創刊号に使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
47	幌延町教育委員会 教育長 兜 賢一	幌延町立小学校教科副読本に使用	幌延町音類1号チャシ跡（仮）写真ほか 写真デジタルデータ計3点	
48	千歳市教育委員会 埋蔵文化財センター長 高橋 理	縄文遺跡群を紹介するハンディサイズリーフレット改訂版に使用	千歳市ママチ遺跡A P310遺物出土状況写真ほか 写真デジタルデータ計61点	
49	北海道環境生活部くらし安全局 縄文遺産推進室長 村井篤司	道庁ホームページ及びブログに使用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
50	北海道環境生活部くらし安全局 縄文遺産推進室長 村井篤司	リーフレットに使用	鳴川右岸遺跡出土縄文時代中期の土器写真ほか 写真デジタルデータ計4点	
51	縄文遺跡群世界遺産登録推進本部 部長 青森県知事 三村申吾	「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の18遺跡をPRするためのポスターに使用	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ1点	
52	コム・システム株式会社 社長 高橋 純	『物流今昔』に使用	白滝遺跡群航空写真 写真デジタルデータ1点	
53	北海道環境生活部くらし安全局 縄文遺産推進室長 村井篤司	道庁ホームページ及びブログに使用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
54	株式会社アッシュ 代表取締役社長 岡本晃一	洋泉社Mook「たのしい「縄文」入門」に使用	函館市桔梗2遺跡出土シヤチ形土製品写真ほか 写真デジタルデータ計2点	
55	毎日新聞社 北海道報道部長 山科武司	毎日新聞北海道の文化財を紹介する連載記事に使用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真デジタルデータ計2点	

c 資料貸出承認一覧

番号	申請者	使用目的	利用資料名・点数	備考
1	MIHO MUSEUM 館長 辻 惟雄	MIHO MUSEUM 秋季特別展「土偶・コスモス」で展示	千歳市美々4遺跡出土土偶（P-373出土）1点	
2	北海道渡島総合振興局 局長 中西猛雄	北の縄文パネル展で展示	「東アジアの先史文化」ほか解説・写真パネル36点	
3	北海道開拓記念館 館長 堀 達也	北海道開拓記念館 第69回特別展「アンモナイト展」で展示	千歳市美々4遺跡出土アンモナイト1点	
4	明治大学博物館 館長 風間 信隆	2012年度明治大学博物館特別展示「氷河時代のヒト・環境・文化」で展示	千歳市柏台1遺跡出土石器、顔料原料42点	
5	北海道開拓記念館 館長 堀 達也	北海道開拓記念館展示資料として（博物館資料の保存一木をのこす一展）で展示	重要文化財千歳市美々8遺跡出土早稲を含む9点	
6	明治大学 黒曜石研究センター長 小野 昭	黒曜石原産地分析に使用	千歳市美々3遺跡出土石器49点	
7	独立行政法人国立文化財機構 九州国立博物館 館長 三輪嘉六	九州国立博物館文化交流展示「海の道、アジアの路」で展示	千歳市キウス4遺跡出土土器（堂林式）5点、千歳市ママチ遺跡出土異形土器（幣舞式）3点、千歳市キウス5遺跡出土土器（幣舞式）1点、千歳市オサツ2遺跡出土土器（統縄文・後北B式）4点、計13点	
8	独立行政法人国立科学博物館 館長 近藤信司	国立科学博物館常設展示で展示	千歳市柏台1遺跡出土顔料のついた砥石1点、千歳市オリカ2遺跡出土湧別技法による細石臼核3点、千歳市オリカ2遺跡出土湧別技法による黒曜石刃石5点、計9点	
9	千歳市教育委員会 教育長 宮崎 肇	千歳市埋蔵文化財センター展示室常設展示で展示	千歳市ユカンボシC2遺跡出土土器3点	

(3) 考古学教室

a 展示室資料ミニミニ解説—その1—

日 時：平成24年6月2日（土）13：30～15：00

講 師：普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：19名（うち道民カレッジ講座参加者4名）

内 容：間近で資料を観察しながら、北海道立埋蔵文化財センターに展示してある資料について、その発見から報告、研究などにおけるその後の状況を簡潔に解説する新企画。第1弾は「ビビちゃん」、千歳市美々4遺跡から出土した動物形土製品を紹介した。成人を対象とした。

b 「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉

日 時：平成24年6月16日（土）13：30～15：30

講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏

参加者：9名（うち道民カレッジ講座参加者2名）

内 容：北海道の遺跡からは様々なガラス玉が出土する。ガラス玉がどのように作られていったのか、色の取り合わせがどのようになされるのかなどを解明するためには、製作技法を理解することが重要である。

ガラス玉の歴史を学ぶとともに、ガスバーナーと市販のガラス棒を使った方法で、実際に丸い玉を作って、整形の難しさ、大きな玉を作ることの難しさなどを体験した。成人を対象とした。

c 「はじめての考古学」教室 1. 発掘入門

日 時：平成24年7月7日（土）13：30～15：30

講 師：普及活用課主査 藤井 浩

参加者：20名（うち道民カレッジ講座参加者14名）

内 容：遺跡を知るうえで欠かせない発掘調査がどのように行われるのかを分かりやすく解説した。成人を対象とした。

d 「はじめての考古学」教室 2. 土器入門

日 時：平成24年8月11日（土）13：30～15：30

講 師：普及活用課主査 藤井 浩

参加者：16名（うち道民カレッジ講座参加者10名）

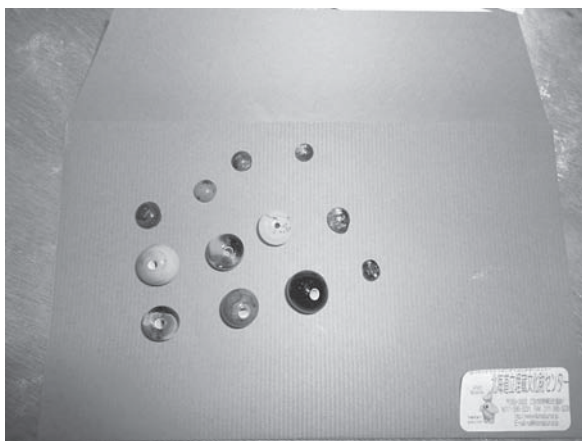
内 容：北海道の土器の基礎知識について、接合・復元、拓本などの整理作業体験を通して解説した。成人を対象とした。



▲展示室資料ミニミニ解説—その1—



▲「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉



▲「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉



▲「はじめての考古学」教室 1. 発掘入門



▲「はじめての考古学」教室 2. 土器入門



▲親子ガラス玉づくり



▲「ものづくりの考古学」教室 2. 石器



▲「ものづくりの考古学」教室 2. 石器

e 「ものづくりの考古学」教室 2. 石器

日 時：平成24年11月10日（土）13：30～15：30
 講 師：第1調査部第4調査課主任 直江康雄
 参加者：15名（うち道民カレッジ講座参加者7名）
 内 容：石器がどのようにつくられ、どのように使われてきたのかを実物を通して紹介し、実際に黒曜石を素材にした石器づくりを行った。手持ちナイフを例として石器づくりの基本原理や刃部の作り方などの石器づくりの概要を説明した後、素材剥片を取る実習、刃潰し加工によるナイフ製作実習や押圧加工による石鏃の製作実習を行った。成人を対象とした。

(4) こども考古学教室

a 親子ガラス玉づくり

日 時：平成24年6月23日（土）13：30～15：30
 講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏
 参加者：18名（うち中学生以下10名）
 内 容：親子を対象としたガラス玉づくりで、内容は一般向けのガラス玉づくりとほぼ同内容である。

b 「夏休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊（第1次・第2次）

日 時：第1次 平成24年7月28日（土）
 第2次 平成24年8月4日（土）
 いずれも13：30～16：00

参加者：第1次24名（うち中学生以下15名）
 第2次27名（うち中学生以下17名）

内 容：第1次では、「収蔵庫に潜入捜査」「考古学者に挑戦（遺物の分類）」「縄文土器の拓本に挑戦」「縄文生活体験・縄文土器をつくってみよう」「探検隊報告」を行った。第2次では、「収蔵庫に潜入捜査」「展示室探検クイズラリーと温湿度測定探検」「展示体験縄文土器を展示してみよう」「自分だけの砂絵をつくってみよう」「探検隊報告」を行った。

企 画：藤井 浩

c 冬の縄文生活体験ひろば

日 時：平成25年1月4日（金）～3月3日（日）
 目 的：縄文時代の道具づくりを通して当時の人々の生活の様子を学ぶ。



▲「夏休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第1次



▲「夏休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第2次



▲「夏休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第2次



▲「夏休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第2次



▲「冬休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第3次



▲「冬休み自由研究教室」まいぶん探検隊 第4次

内 容：勾玉づくりやアクセサリーづくりなど、主に縄文時代の道具づくりを通して、当時の生活を体感する。実際には「カタログ」「レシピ（つくりかた手順）」を参考に、自分で選んだ素材や道具を用いて道具をつくる。主に以下の製作体験を準備した。

「勾玉・丸玉・管玉・白玉・小玉をつくる」、「耳

飾りに挑戦」、「土面や土偶をつくる」、「ミニチュア縄文土器づくりに挑戦」、「縄文時代の布編みに挑戦」「拓本体験」「火おこしに挑戦しよう」、「発掘体験」「砂絵体験」「土器パズル」。

企 画：藤井 浩

d 「冬休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊（第3次・第4次）

日時：第3次 平成25年1月5日（土）

第4次 平成25年1月12日（土）

参加者：第3次 18名（うち中学生以下11名）

第4次 25名（うち中学生以下15名）

内容：第3次は、「火おこし体験」に関わる作業の様々な工程の体験を主な内容とした。火おこしに関わる展示見学、軸木と火きり板の製作、製作した道具で火おこし体験を行った。第4次は、「勾玉づくり体験」に関わる作業の様々な工程の体験を主な内容とした。勾玉に関わる展示見学、弓ぎりのミニチュアによる勾玉原石の穿孔実験、勾玉づくり体験を行った。

企画：藤井 浩

(5) 市町村出前講座

a 事業目的

完全学校週5日制に対応し、土・日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにわかりやすく地域の歴史や文化を説明すると

もに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通じて豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自事業実施の契機となるよう努める。

b 事業内容

①地域の遺跡を学ぶ—実物にふれてみよう—

地元市町村や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に実際に触れてもらいながら、地元の埋蔵文化財についての説明を行う。また、埋蔵文化財紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

②体験学習

子供たちの歴史・文化に対する関心をより高めるために、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料に紙ヤスリなどで実際に製作する。また、時間の許す限り、石器（黒曜石破片）での紙切り、火おこしなどの体験学習を行う。



▲考古学教室出前講座1 北斗市



▲考古学教室出前講座2 小樽市



▲考古学教室出前講座3 剣淵町



▲考古学教室出前講座4 大空町

c 実施市町村一覧

考古学教室出前講座（事業分）

番号	市町村	実施場所	実施日	人数	担当	備考*「」内は先方の事業名
1	北斗市	北斗市立谷川小学校	5月9日(水)	34	倉橋	6年生の2～4校時授業(勾玉づくり)
2	小樽市	小樽市立手宮西小学校	6月27日(水)	18	倉橋	6年生の2～4校時授業(勾玉づくり)
3	剣淵町	剣淵町資料館	8月3日(金)	14	鎌田	「公民館講座夏休み企画 勾玉をつくろう」
4	大空町	大空町女満別研修会館	9月1日(土)	14	鎌田	「公民館講座 埋蔵文化財講座」(勾玉づくり)
5	雨竜町	雨竜町公民館	9月29日(土)	16	倉橋	「2012ちびっこチャレンジ教室part8 親子まが玉づくり」
6	利尻町	利尻町交流促進施設「どんと」	10月8日(月)	30	倉橋	「考古学教室出前講座まが玉づくり」
7	羽幌町	羽幌町中央公民館	11月11日(日)	33	藤井	「こども自然教室 考古学教室(勾玉づくり)」
8	黒松内町	ふれあいの森情報館「マナベール」	11月17日(土)	24	藤井	「わんぱく探検団 勾玉づくり」

考古学教室出前講座（依頼分）

番号	市町村	実施場所	実施日	人数	担当	備考*「」内は先方の事業名
1	北広島市	北広島市中央公民館	7月8日(日)	100	藤井	「北広島市中央公民館第14回ワクワク公民館子どもまつり」(勾玉づくり)
2	岩見沢市	岩見沢市立北真小学校	7月25日(水)	38	藤井	6年生の2～4校時授業(火おこし)。NPO法人炭鉱の記憶推進事業団の協力により火おこしのできた火で石炭を燃やす体験
3	札幌市	札幌市立しらかば台小学校	12月6日(木)	19	藤井	先生と父母の会による家庭教育の学習会(勾玉づくり)



▲考古学教室出前講座5 雨竜町



▲考古学教室出前講座6 利尻町



▲考古学教室出前講座7 羽幌町



▲考古学教室出前講座8 黒松内町

(6) 講演会・報告会

a 財団法人北海道埋蔵文化財センター
平成23年度発掘調査報告会

日 時：平成24年4月21日（土）13：30～17：05
会 場：2階研修室

内 容：平成23年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち、下記の遺跡について、スライドを使用して発掘成果の報告を行った。

また、3月31日（土）から開催している特別展示「財団法人北海道埋蔵文化財センター平成23年度発掘調査成果展」の会場である展示室では、報告者による展示解説を行った。

- ①江別市対雁2遺跡 佐川俊一
- ②長沼町南六号川左岸、幌内D遺跡 鈴木宏行
- ③北斗市押上1遺跡 福井淳一
- ④木古内町札苅5・6遺跡 土肥研晶
- ⑤木古内町大平遺跡 酒井秀治
- ⑥福島町館崎遺跡 影浦 覚
- ⑦木古内町木古内遺跡・木古内2遺跡 愛場和人・広田良成
- ⑧根室市トーサム湖周辺竪穴群 広田良成
- ⑨更別村香川遺跡 中山昭大

参加者：106名（うち道民カレッジ講座参加者21名）
企 画：財団法人北海道埋蔵文化財センター調査

部

b 秋季講演会

「地形から学ぶ土地の歴史—地理と考古のコラボレーションの現場から—」

日 時：平成24年9月15日（土）13：30～15：30
会 場：2階研修室

講 師：早稲田大学教授 久保純子 氏

[内 容] 地形分類を通して遺跡調査と関わりの深い講師から、国内や世界各国の事例を歴史や自然災害などとともに紹介していただいた。

参加者：53名（うち道民カレッジ18名）

企 画：藤井 浩

c 春季講演会

「ほっかいどう発掘ものがたり vol.1」

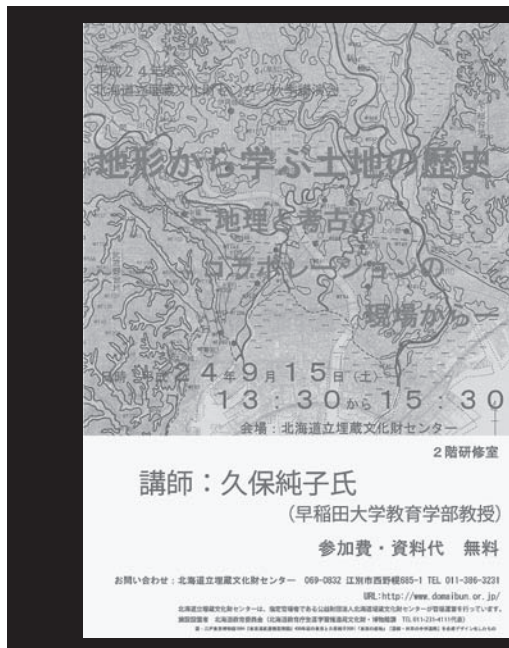
日 時：平成25年3月2日（土）13：30～15：30
会 場：2階研修室

講 師：元札幌市市民局文化財課長 加藤邦雄 氏

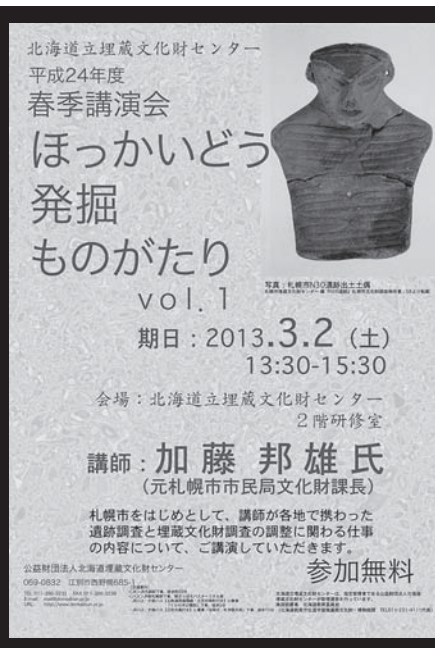
内 容：札幌市をはじめとして、講師が道内各地で携わった遺跡調査についてわかりやすく解説していただいた。

参加者：60名（うち道民カレッジ12名）

企 画：倉橋直孝



▲秋季講演会ポスター



▲春季講演会ポスター

(7) 教育連携講座

小・中学校、大学及び社会教育団体等を対象とする体験型教育連携講座を11回実施した。収蔵庫・展示収蔵庫・展示室見学の後、展示室探検ラリーや勾玉づくり体験講座を実施した。期日、事業名、内容、人数は下の表に記載した。

(8) 共催・協力など

a 北海道文化財保護協会

「子どもの文化財愛護活動推進事業」

北海道文化財保護協会の「子どもの文化財愛護活動推進事業」に協力し、2カ所で出前講座を実施した。

①浦幌町立博物館講座（歴史編）

日 時：平成24年7月21日（土）9：00～11：45

会 場：浦幌町立博物館

対 象：小学生以下の子どもと保護者

内 容：北海道文化財保護協会事務局長の高久忠明氏の講演「文化財の保護と活用」の後、北海道教育委員会のホームページ「北の縄文案内」を使って浦幌町の遺跡を紹介した。千歳市キウス4遺跡出土勾玉を観察して、勾玉づくりを実施した。

講 師：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：21名

②平成24年度 考古学出前講座

「まが玉を作ってみよう」

日 時：平成24年8月18日（土）9：00～12：00

会 場：厚岸町立真龍小学校2階図工室

対 象：小学生以下の子どもと保護者



▲浦幌町立博物館講座

内 容：北海道文化財保護協会事務局長の高久忠明氏の講演「文化財の保護と活用」の後、北海道教育委員会のホームページ「北の縄文案内」を使って厚岸町の遺跡を紹介した。千歳市キウス4遺跡出土勾玉を観察して、勾玉づくりを実施した。

講 師：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：22名

b 講師派遣

①北広島市エコミュージアム推進事業

まちを好きになる市民大学

歴史遺産特講1（調査実習）

依頼元：北広島市教育委員会

日 時：平成24年9月1日（土）10：30～12：00

会 場：北広島市中央公民館

対 象：市民大学3期生

内 容：「北の里3遺跡」発掘調査報告書をテキストに、報告書の構成や内容などを詳しく解説した。

教育連携講座

番号	期 日	事 業 名	内 容	人数
1	平成24年5月25日(金)	石狩教育局平成24年度初任者研修	勾玉づくり	11
2	平成24年6月1日(金)	北広島市立緑陽中学校体験学習	展示室探検ラリー	66
3	平成24年6月20日(水)	江別市角山小学校体験学習	勾玉づくり	10
4	平成24年7月1日(日)	北翔大学菊地先生講義利用	勾玉づくり	35
5	平成24年7月12日(木)	札幌学院大学鶴丸先生講義利用留学生体験学習	展示室探検ラリー・勾玉づくり	61
6	平成24年10月2日(火)	江別市立北光小学校体験学習	勾玉づくり	15
7	平成24年10月6日(土)	江別市郷土資料館子ども学芸員カレッジ講座	勾玉づくり	20
8	平成24年10月25日(木)	北翔大学渡部先生講義利用	勾玉づくり	6
9	平成24年11月4日(日)	北翔大学菊地先生講義利用	勾玉づくり	3
10	平成25年1月16日(水)	江別市郷土資料館研修	勾玉づくり	4
11	平成25年1月17日(木)	札幌学院大学鶴丸先生講義利用留学生体験学習	展示室探検ラリー・勾玉づくり	53

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩
参加者：19名

②北広島市エコミュージアム推進事業

まちを好きになる市民大学

歴史遺産特講2（歴史遺産研究）

依頼元：北広島市教育委員会

日時：平成24年9月8日（土）10：30～12：00

会場：北広島市中央公民館

対象：市民大学3期生

内容：バスで島松川左岸チャシ跡、中の沢チャシ跡など市内6カ所の遺跡を巡検し、概要を説明した。

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩
参加者：19名

③北広島市エコミュージアム推進事業

まちを好きになる市民大学 考古学資料論

依頼元：北広島市教育委員会

日時：平成24年11月10日（土）10：30～12：00

会場：北広島市中央公民館

対象：市民大学4期生

内容：市内の遺跡を理解するために必要な、考古学の基本的な事項や、発掘調査の内容、埋蔵文化財の保護について、当センターのビデオを交えて説明した。

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩
参加者：19名

④北広島市エコミュージアム推進事業

まちを好きになる市民大学 歴史遺産報告会

依頼元：北広島市教育委員会

日時：平成24年12月1日（土）10：30～12：30

会場：北広島市中央公民館

対象：市民大学3期生

内容：歴史遺産特講の総括として、参加者による市内遺跡についての報告会を行った。各報告についてコメントし、報告終了後に総括を行った。

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩
参加者：20名

⑤北星学園短期大学部アSEMBリⅡ



▲まちを好きになる市民大学 歴史遺産特講2

依頼元：北星学園短期大学

日時：平成24年12月4日（土）10：30～12：00

会場：北星学園短期大学

対象：学生

内容：キャリア支援科目としてのアSEMBリ（総合講義）の一環で「過去からのメッセージ 遺跡から北海道を知る」がテーマとなった。当センターのビデオ「遺跡ってなあに」を中心に、調査員の仕事を紹介した。

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩
参加者：100名

(9) 周辺施設との連携

江別市から札幌市北東部に所在する各文化施設と、以下のa～dの連携を行っている。各連携参加状況および参加施設については、次頁下の「周辺施設との連携参加一覧」の通りである。

a 文京台地区道立教育3施設連携

江別市文京台地区にある北海道立図書館、北海道立教育研究所、北海道立埋蔵文化財センターが、今後さらに地域に根ざし、開かれた「施設」を目指すため、各施設機能の連携に努めるとともに、職員の親睦交流を通して相互理解と連帯意識を図ることを目的として平成15年から連携事業を行っている。今年度も、7月以降に実施する事業を紹介するリーフレットを合同で作成した。このリーフレットは7月13日に文京台第1自治会（約280戸）、文京台第2自治会（約900戸）、文京台東町自治会（約490戸）の計約1670戸に145部回覧した。

b 発見！体験！森林公園スタンプラリー！

夏休み探検隊

日 時：平成24年7月7日(土)～9月2日(日)
 会 場：北海道開拓記念館・北海道開拓の村・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター

内 容：各施設でスタンプをもらい、全てのスタンプが揃ったら記念品が貰える。記念品の交換場所は北海道立埋蔵文化財センターとした。全体の参加者は2207人、うち325人に記念品を渡した。期間中のセンター入館者は2937人だった。



▲ “かるちやるnet” 紹介パネル展2012

c かるちやるnet

新札幌から江別市南西には社会教育的文化施設が集中し、地域に暮らす人たちにとって恵まれた環境にある。各文化施設は地域文化の向上や知的財産の継承など重要な役目を担っているが、財政の悪化により運営・事業の見直しを迫られ、取り巻く情勢は厳しさを増している。このような状況を踏まえ、各施設が協力・連携を強化し、意見交換・連携事業・広報事業などの実施を協議する場として結成された。

平成21年に北海道がイオン北海道株との包括的連携協定を締結する際に北海道開拓記念館が企業側に提案した「道の教育・文化施設の広報活動への協力・協働事業」を基礎とする。

① “かるちやるnet” 紹介パネル展2012

日 時：平成24年9月28日(金)～10月1日(月)
 会 場：イオン江別店3F 総合案内所前
 対 象：一般
 内 容：各施設が実施する行事等をパネルで紹介し、パンフレット・チラシ類を置いて施設のPRを実施した。9月29日(土)と30日(日)の10:00～16:00は、“かるちやるnet”参加施設の職員が会場に滞在して、クイズラリーや体験・実演コーナーの運営を行った。

d のっぽろ11ネット

今年度は活動していない。

周辺施設との連携参加一覧

名 称	文京台地区 道立教育3施設 連携	発見！体験！ 森林公園スタンプラリー！ 夏休み探検隊	かるちやるnet	のっぽろ11ネット
江別市郷土資料館			○	
江別市スポーツ振興財団				○
野幌自治会				○
北海道情報大学				○
野幌中学校				○
江別市セラミックアートセンター			○	○
野幌総合運動公園事務所				○
酪農学園大学				○
北海道立図書館	○	○	○	
北海道立教育研究所	○		○	
札幌学院大学				○
北翔大学				○
北海道立埋蔵文化財センター	○	○	○	○
自然ふれあい交流館		○	○	
道立自然公園野幌森林公園			○	
北海道開拓記念館		○	○	
北海道開拓の村		○	○	○
サンピアザ水族館			○	
札幌市青少年科学館			○	

7 利用状況など

今年度のセンター利用者は、前年度より10.42%増加した。前年度よりも入館者数が増加した月は4月、8月、10～2月、減少した月は5～7月、9月、3月である。このうち、4～10月は7か月連続して毎月1,000人を超えるという、これまでにない入館者数を記録した。また4月と8月には、その月としてはこれまでの最高の入館者数を記録した。

(1) 入館者数一覧

月別入館者数一覧

月	開館日数	大人(男性)	大人(女性)	子供	合計
平成24年4月	24	540	433	271	1244
平成24年5月	24	453	314	360	1127
平成24年6月	26	543	380	220	1143
平成24年7月	26	482	448	313	1243
平成24年8月	27	494	435	798	1727
平成24年9月	26	484	297	237	1018
平成24年10月	26	456	297	266	1019
平成24年11月	25	424	202	110	736
平成24年12月	20	263	138	25	426
平成25年1月	24	234	180	137	551
平成25年2月	24	204	166	35	405
平成25年3月	22	328	252	74	654
合計	294	4905	3542	2846	11293

平成11年度から平成24年度までの入館者数

	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	合計
4月		758	656	545	538	831	595	830	669	904	1192	799	920	1244	10481
5月		709	453	656	1081	964	716	1440	1228	1403	1978	1755	1223	1127	14733
6月		652	621	808	1299	1054	858	768	1099	1150	934	1597	1277	1143	13260
7月		527	303	633	922	828	1124	1138	1425	1126	1537	1117	1278	1243	13201
8月		673	388	662	789	747	851	1238	1517	1267	1370	982	1230	1727	13441
9月		544	374	631	762	1020	727	790	907	768	1169	995	1110	1018	10815
10月		650	302	649	991	1027	773	945	939	1267	1120	1214	839	1019	11735
11月	1988	467	659	445	836	669	618	669	627	653	745	794	539	736	10445
12月	687	286	326	669	505	330	318	232	536	488	577	370	423	426	6173
1月	593	218	411	287	229	189	240	462	633	488	516	344	379	551	5540
2月	366	129	240	212	270	187	189	226	329	450	374	268	286	405	3931
3月	469	221	362	297	331	296	366	329	528	549	472	511	696	654	6081
合計	4103	5834	5095	6494	8553	8142	7375	9067	10437	10513	11984	10746	10200	11293	119836

は最多（平成11年度を除く）

特別展示期間中の入館者

展 示 タ イ ト ル	期 間	入館者数
（財）北海道埋蔵文化財センター平成23年度発掘調査成果展	平成24年3月31日（土）～6月10日（日）	2938
「縄文人に挑戦—見る、触れる、つくる、縄文生活体験ひろば—」展	平成24年6月30日（土）～10月14日（日）	4575
「北海道遺跡百選5 北海道遺跡空中散歩—空から遺跡を見てみよう—」展	平成24年10月27日（土）～平成25年3月3日（日）	2336
特別展示期間中の入館者数合計		9849
世界遺産をめざす北の縄文展	平成24年4月1日（土）～平成25年3月31日（日）	11293

報告会・講演会参加者

事 業 名	期 日	参加者数
（財）北海道埋蔵文化財センター平成23年度発掘調査報告会	平成24年4月21日（土）	106
秋季講演会「地形から学ぶ土地の歴史—地理と考古のコラボレーションの現場から—」	平成24年9月15日（土）	53
春季講演会「ほっかいどう発掘ものがたり vol.1」	平成25年3月2日（土）	60

考古学講座参加者

事 業 名	期 日	参加者数
展示室資料ミニミニ解説 —その1—	平成24年6月2日（土）	19
「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉	平成24年6月16日（土）	9
「はじめての考古学」教室 1. 発掘入門	平成24年7月7日（土）	20
「はじめての考古学」教室 2. 土器入門	平成24年8月11日（土）	16
「ものづくりの考古学」教室 2. 石器	平成24年11月10日（土）	15

こども考古学教室参加者

事業名	期日	参加者数
「親子ガラス玉づくり」	平成24年6月23日(土)	18
「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第1次)	平成24年7月28日(土)	24
「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第2次)	平成24年8月4日(土)	27
「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第3次)	平成25年1月5日(土)	18
「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第4次)	平成25年1月12日(土)	25

考古学教室出前講座

事業名	期日	参加者数
考古学教室出前講座1 北斗市	平成24年5月9日(水)	34
考古学教室出前講座2 小樽市	平成24年6月27日(水)	18
考古学教室出前講座3 剣淵町	平成24年8月3日(金)	14
考古学教室出前講座4 大空町	平成24年9月1日(土)	14
考古学教室出前講座5 雨竜町	平成24年9月29日(土)	16
考古学教室出前講座6 利尻町	平成24年10月8日(月)	30
考古学教室出前講座7 羽幌町	平成24年11月11日(日)	33
考古学教室出前講座8 黒松内町	平成24年11月17日(土)	24

(2) 団体利用者対応

施設見学のほか、学校や教育機関、子ども関係、高齢者関係の団体を対象に勾玉づくりや火おこし、砂絵などの体験学習等を25回実施した。また、大学の学外授業や講座を11回行った。団体利用者数は1530人である。

小学校

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	人数
24	5	8	火	札幌市立小野幌小学校体験学習(施設見学・火おこし体験)	34
		9	水	札幌市立小野幌小学校体験学習(施設見学・火おこし体験)	34
		10	木	札幌市立小野幌小学校体験学習(施設見学・火おこし体験)	34
				江別市立文京台小学校体験学習(勾玉づくり体験)	24
	8	30	木	江別市立上江別小学校体験学習(展示室探検ラリー・整理作業見学・火おこし・ミニチュア土器製作体験)	162
		31	金	岩見沢市立幌向小学校体験学習(勾玉づくり体験)	60
計					348

大学

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数	
24	4	25	水	札幌学院大学鶴丸先生講義利用	102	
		5	12	土	札幌学院大学畑先生講義利用(施設見学)	6
			17	木	北翔大学末次先生講義利用(施設見学)	6
			27	日	北翔大学菊地先生講義利用	11
	10	11	木	北翔大学佐藤先生講義利用(保存処理室・作業棟・展示室見学)	14	
		18	木	北翔大学渡部先生講義利用	6	
		20	土	札幌国際大学越田先生講義利用(作業棟・展示室見学)	21	
	11	11	日	札幌国際大学畑先生講義利用(勾玉づくり体験)	15	
		24	土	札幌大学田口先生講義利用	13	
		25	5	土	札幌大学田口先生講義利用	5
17	木		札幌学院大学鶴丸先生講義利用(勾玉づくり体験)	53		
計					252	

教育関係等の団体

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数
24	9	4	火	江別市郷土資料館博物館実習施設見学	6
		11	火	北海道立教育研究所社会科教員研修	24
		15	土	縄文遺跡群世界遺産登録推進国際会議施設見学	24
		25	火	北海道立教育研究所研修	13
	11	9	金	江別市教育委員会少年指導センター施設見学・勾玉づくり体験	8
		17	土	文化財博物館団体交流会施設見学	47
25	1	22	火	中国広西文物考古研究所・南寧市博物館施設見学	6
	2	9	土	恵庭市教育委員会「雪の森へようこそ～ふかふかの雪で雪上ハイキング&雪遊び～」施設見学	11
計					139

子ども関係の団体

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数
24	4	7	土	大麻ジュニアクラブ施設見学	6
	7	8	日	札幌市清田区子ども会育成連合会施設見学	33
		14	土	大麻ジュニアクラブ施設見学	6
	10	9	火	大麻ジュニアクラブ施設見学・勾玉づくり体験	43
		19	金	ベストフレンズ施設見学・勾玉づくり体験	21
12	15	土	サンサンキッズ施設見学	5	
25	1	9	水	サンサンキッズ勾玉づくり体験	23
		17	木	元江別わかば児童会勾玉づくり・砂絵体験	30
計					167

福祉関係の団体

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数
24	5	19	土	菊水ワークセンター施設見学・勾玉づくり体験	23
計					23

高齢者関係の団体

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数
24	4	17	火	デイサービスふくろうの森施設見学	3
		10	木	白石駅前百年会施設見学	22
	5	26	土	ヒューマンライフケア厚別デイサービス勾玉づくり体験	5
		15	金	三笠市共栄老人クラブ施設見学	10
	7	18	水	おおあさクリニック東野幌デイサービス施設見学	9
		26	木	東川下老人クラブ施設見学	40
	8	24	金	美香保いきいきクラブ施設見学	46
				ヒューマンライフケア厚別デイサービス施設見学・勾玉づくり体験	14
		28	火	デイサービスなのはな施設見学・勾玉づくり体験	20
	9	2	日	デイサービス結いの家文京台施設見学	6
		12	水	札幌市西発寒ことぶき会施設見学	30
		15	土	デイサービスセンターパワフルひまわり施設見学	10
		19	水	野幌中央クラブ施設見学	20
		21	金	デイサービスセンター禎心会東施設見学・勾玉づくり体験	8
	10	4	木	デイサービスセンター禎心会東施設見学・勾玉づくり体験	12
		9	火	デイサービスセンター禎心会東施設見学・勾玉づくり体験	8
		10	水	デイサービスセンター禎心会東施設見学	11
		11	木	デイサービスセンター禎心会東勾玉づくり体験	9
		12	金	デイサービスセンター禎心会東勾玉づくり体験	7
	11	14	水	通所介護センターあいの里施設見学・勾玉づくり体験	14
		29	木	デイサービスセンターふくろうの森施設見学	10
	12	7	金	デイサービスセンターモアサロン福寿施設見学	6
		13	木	通所介護センターあいの里勾玉づくり体験	11
		14	金	通所介護センターあいの里勾玉づくり体験	7
18		火	江別ケアパークそよ風砂絵体験	17	
25	2	28	木	デイサービスセンターふくろうの森施設見学	8
		21	木	白石ケアセンターそよ風施設見学	10
	3	21	木	デイサービスがまの穂施設見学	11
		22	金	白石ケアセンターそよ風施設見学	4
計					388

その他の団体

年	月	日	曜日	団体名・見学・体験学習・学外授業等	人数
24	4	18	水	登別郷土文化研究会施設見学	32
		24	火	女流書作家集団施設見学	10
	5	11	金	シン技術コンサル施設見学	21
		16	水	山形県村山様ほか施設見学	6
	7	5	木	江別パソコン画像操作を楽しむ会施設見学	12
		15	日	手稲早起き一万歩あるく会施設見学	99
	10	10	水	郵雪会札幌白石支部施設見学	5
27		土	厚別東地区民生委員児童委員協議会施設見学・勾玉づくり体験	15	
25	3	9	土	アイヌの畑作農耕を探る集い施設見学	13
計					213

8 図書資料

(1) 購入図書一覧

書名	編著者名	出版者
考古調査ハンドブック6 山岳考古学	時枝 務	ニュー・サイエンス社
考古調査ハンドブック7 観光考古学	坂詰秀一	ニュー・サイエンス社
土偶と縄文社会	阿部芳郎	雄山閣
発掘された日本列島 2012 新発見考古速報	文化庁	朝日新聞出版
道が語る日本古代史	近江俊秀	朝日新聞出版
道具と人類史	戸沢充則	新泉社
ムシの考古学	森 勇一	雄山閣
考古学からみた古代日本の紡織 改定新装版	東村純子	六一書房
骨考古学と蝦夷・隼人 (市民の考古学第12巻)	瀧川 渉	同成社
古墳と被葬者の謎にせまる	大塚初重	祥伝社
縄文人の石神 大形石器にみる祭儀行為	谷口康浩	六一書房
水中考古学のABC	井上たかひこ	成山堂書店
文化遺産の眠る海 水中考古学入門	岩淵聡文	化学同人
ガラスが語る古代東アジア (ものが語る歴史27)	小寺智津子	同成社
気候変動の考古学	安齋正人	同成社
日本列島の自然を調べよう 自身のしくみ大地のなりたち (調べてナットク! みんなの博物館1)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
地球のはじまりと生物の進化を調べよう 恐竜出現・人類へのあゆみ (調べてナットク! みんなの博物館2)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
日本の歴史を調べよう1 自身のしくみ大地のなりたち (調べてナットク! みんなの博物館3)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
日本の歴史を調べよう2 自身のしくみ大地のなりたち (調べてナットク! みんなの博物館4)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
くらしと伝統工芸について調べよう いのり・あそび・ものづくり (調べてナットク! みんなの博物館5)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
博物館ガイド・さくいん (調べてナットク! みんなの博物館 別巻)	「みんなの博物館」編集委員会	河出書房新社
道具の使い方がわかる本 持ち方使い方安全指導 楽しく安全に学習を進めるための手引き	鈴石弘之	小学館
アイヌの叙事詩 (北方新書015)	北道邦彦	北海道出版企画センター
近世日本の北方図研究	高木崇世芝	北海道出版企画センター
料理の起源 (読みなおす日本史)	中尾佐助	吉川弘文館
金属が語る日本史 (歴史文化ライブラリー355)	斎藤 努	吉川弘文館
被災地の博物館に聞く 東日本大震災と歴史・文化資料	国立歴史民俗博物館	吉川弘文館
日本地図史	金田章裕、上杉和央	吉川弘文館
草地と日本人 日本列島草原1万年の旅	須賀 丈ほか	築地書館
星地名 縄文の知恵と東北大震災	森下年晃	無明舎出版
人類の進化 大図鑑	アリス・ロバーツ	河出書房新社
動産文化財救出マニュアル 思い出の品から美術工芸品まで	動産文化財救出マニュアル編集委員会	クバプロ
ビジュアルブック骨 骨格から探る生き物のふしぎ ヒト、イヌ、クジラから古生物まで		ニュートンプレス
東アジア地図帳 日本の居場所がよくわかる	今谷明ほか	草思社
散骨は、すべきでない 埋葬の歴史から	長澤宏昌	講談社ビジネスパートナーズ
地震で沈んだ湖底の村 琵琶湖湖底遺跡を科学する	林博通ほか	サンライズ出版

(2) 受領刊行物一覧 (*所在地市町村コード順に掲載)

[北海道]
北海道教育庁生涯学習推進局
平成23年度アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ40 コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る
平成23年度アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ41 シノッチャみだらごとにふける女の歌
平成23年度アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ42 コタンラウンクルがフレウケウンクルに化ける曲
平成23年度アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗技術調査4)
財アイヌ文化振興研究推進機構
アイヌ生活文化再現マニュアル 五弦琴 トンコリ
アイヌ生活文化再現マニュアル 子どもたちの遊び ヘカッター シノッ
北海道大学 総務企画部広報課
季刊 リテラポプリ 48号
季刊 リテラポプリ 49号
季刊 リテラポプリ 50号
北海道大学総合博物館
北海道大学総合博物館ニュース 25号
北海道大学総合博物館ニュース 26号
「都ぞやよい」百年記念誌

明治45年恵迪寮歌 都ぞ弥生百年記念展のしおり
北海道立アイヌ民族文化研究センター
アイヌ民族文化研究センターだよりNo.36
アイヌ民族文化研究センターだよりNo.37
北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2011（平成23年度）
北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第18号
アイヌ語地名を歩く -山田秀三の地名研究から-
北海道開拓記念館
北海道開拓記念館研究紀要 第40号
北海道開拓の村
村民だより VOL.21
恵庭市郷土資料館
恵庭市郷土資料館年報17
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
2010年 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 年報
浦幌町立博物館
浦幌町立博物館年報 第12号
浦幌町立博物館紀要 第12号
美幌博物館
美幌町文化財調査報告26 高野 3 遺跡
美幌町文化財各種開発確認調査報告書
[青森]
青森県立郷土館
寄贈記念成田彦栄コレクション選
[岩手]
名久井文明
伝承された縄紋技術
[宮城]
東北歴史博物館
東北歴史博物館 研究紀要13
[秋田]
秋田県立博物館
秋田県立博物館ニュース No.155
秋田県立博物館 年報 平成24年
[福島]
三春町教育委員会 三春町歴史民俗資料館
三春町文化財調査報告書 第32集 来光院跡
[栃木]
(財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
栃木県埋蔵文化財調査報告 第342集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報34 平成22年度
栃木県埋蔵文化財調査報告 第343集 甲塚古墳
栃木県埋蔵文化財調査報告 第344集 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査・工事立会概要報告書
栃木県埋蔵文化財調査報告 第345集 鷺宿城跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第346集 小曾根遺跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第347集 上金枝 I 遺跡・上金枝 II 遺跡・山の神 II 遺跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第348集 上金枝 I 遺跡・上金枝 II 遺跡・上金枝 III 遺跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第349集 仲内遺跡 2
栃木県埋蔵文化財調査報告 第350集 和田遺跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第351集 菅田古墳群
栃木県埋蔵文化財調査報告 第352集 神畑遺跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第353集 樺崎渡戸古窯跡・樺崎中妻遺跡・栃木西遺跡・唐沢山城跡
栃木県埋蔵文化財調査報告 第354集 東谷・中島地区遺跡群12
栃木県埋蔵文化財調査報告 第355集 東谷・中島地区遺跡群13
栃木県埋蔵文化財センターだより 2011 11月
栃木県埋蔵文化財センターだより 2012 2月
栃木県埋蔵文化財センターだより 2012 6月

財とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター年報 第22号 (平成24年度版)
[埼玉]
所沢市立埋蔵文化財調査センター
所沢市埋蔵文化財調査報告書 第54集 上新井台遺跡
所沢市埋蔵文化財調査報告書 第55集 市内遺跡調査報告18
所沢市埋蔵文化財調査報告書 第56集 山際遺跡
所沢市埋蔵文化財調査報告書 第57集 下安松遺跡
所沢市立埋蔵文化財調査センター 年報 No.17 (平成22年度)
桶川市教育委員会
平成23年度 桶川市内遺跡発掘調査報告書
後谷遺跡 縄文のタイムカプセル
吉見町埋蔵文化財センター
吉見町埋蔵文化財調査報告書 第11集 町内遺跡 6
[東京]
明治大学博物館
明治大学博物館特別展図録 「氷河時代のヒト・環境・文化」
(公社) 日本文化財保護協会
埋蔵文化財調査要覧 平成24年度
飛天 平成24年会報
駿台史学会
駿台史學 第144号
駿台史學 第145号
駿台史學 第146号
有限会社パケット
スラスラ読めて丸わかり 日本史
港区立港郷土資料館
港区考古学ブックレット4 港区の先史時代Ⅱ 港区の弥生時代
研究紀要14 平成23年度
港区埋蔵文化財調査年報9 ー平成22年度の調査他ー
大田区教育委員会 大田区立郷土博物館文化財係
東京都大田区 西六郷一丁目22番貝塚 発掘調査報告書 ー西六郷一丁目18番地点の調査ー
(株)バスコ文化財センター
神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書7 神成松遺跡第2地点
[神奈川]
神奈川県埋蔵文化財センター
神奈川県埋蔵文化財調査報告57 平成22年度 神奈川県内埋蔵文化財発掘調査一覧
神奈川県埋蔵文化財センター 年報24 2011 (平成23) 年度
(公財) かながわ考古学財団
かながわ考古学財団調査報告286 葉山島中平遺跡
横浜市歴史博物館
横浜市歴史博物館 NEWS 32
横浜市歴史博物館 NEWS 33
専修大学考古学会
専修考古学 第14号
[新潟]
新潟市文化財センター
国指定史跡 古津八幡山遺跡 歴史の広場 弥生の丘展示館ガイドブックNo.1
大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査
三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査
旧武田家住宅及び畜舎解体復原工事報告書
敬和学園大学
人文社会科学研究所年報 第10号
[富山]
富山県埋蔵文化財センター
縄文時代中期の石斧つくりのムラ 浦山寺蔵遺跡2 土器・石器編
富山県出土の重要考古資料5 縄文時代中期の石斧つくりのムラ 浦山寺蔵遺跡

特別展 寧楽と越 大伴家持のみた万葉の越
富山県埋蔵文化財センターニュース 「埋文とやま」 V O L . 118
富山県埋蔵文化財センターニュース 「埋文とやま」 V O L . 119
富山県埋蔵文化財センターニュース 「埋文とやま」 V O L . 120
富山県埋蔵文化財センターニュース 「埋文とやま」 V O L . 121
富山県埋蔵文化財センター年報 平成22年度
富山県埋蔵文化財センター年報 平成23年度
小矢部市教育委員会
小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第72冊 富山県小矢部市 平成23年度 小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報
[福井]
一乗谷朝倉氏遺跡管理事務所
朝倉館跡庭園修理整備報告書
[岐阜]
岐阜県文化財保護センター
岐阜県文化財保護センター調査報告書 第124集 芥見町屋遺跡
[静岡]
伊東市文化財管理センター
伊東市埋蔵文化財調査報告 静岡県伊東市 市内遺跡試掘・確認調査報告書
[三重]
三重県埋蔵文化財センター
近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 J C T ～ 亀山西 J C T ）建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ
埋蔵文化財発掘調査概報24
三重県埋蔵文化財調査報告333 林垣内遺跡発掘調査報告
[滋賀]
滋賀県教育委員会
赤野井湾補助河川環境整備事業に伴う発掘調査報告書2 赤野井湾遺跡
(公財) 滋賀県文化財保護協会
古代近江の渡来文化 シリーズ近江の文化財005
紀要 25号
大津市教育委員会
大津市埋蔵文化財調査年報 平成22（2010）年度
[京都]
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都府中世城館跡調査報告書 第1冊 - 丹後編 -
京都府埋蔵文化財調査報告書 平成23年度
[大阪]
堺市
重要文化財 山口家住宅保存修理工事報告書
堺市教育委員会
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第133冊 平成21年度市内遺跡立会調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第134冊 大保遺跡（D I H - 7）・太井遺跡（T A I - 4）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第135冊 境環濠都市遺跡（S K T 1025）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第136冊 陶器遺跡（T O K - 3）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第137冊 四ッ池遺跡（Y O B 128）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第138冊 平成22年度市内遺跡立会調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第139冊 太井遺跡（T A I - 5）発掘調査概要報告 真福寺遺跡（S P J - 2）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第140冊 金岡遺跡（K N O - 3）発掘調査概要報告
堺市埋蔵文化財調査概要報告 第141冊 境環濠都市遺跡発掘調査概要報告
百舌鳥古墳群の調査4
百舌鳥古墳群の調査5 御廟山古墳（G B Y - 6）発掘調査報告書
百舌鳥古墳群の調査6
百舌鳥野の幕開け - 大王墓築造開始の謎に迫る - 第1回百舌鳥古墳群講演会記録集
徹底分析・仁徳陵古墳 巨大前方後円墳の実像を探る 第2回百舌鳥古墳群講演会記録集 堺市文化財講演会録 第4集
堺の宝 土塔の文字瓦 第2回史跡土塔講演会記録集
平成22年度 国庫補助事業発掘調査報告書
平成23年度 国庫補助事業発掘調査報告書

ニサンザイ古墳発掘調査 現地見学会資料
史跡土塔の文字瓦
岸和田市教育委員会
岸和田市文化財調査概要38 平成23年度 発掘調査概要
第24回 濱田青陵賞授賞式
[兵庫]
那珂ふれあい館
多可町文化財報告17 安坂・津ぶら遺跡 安坂・門田遺跡Ⅱ
多可町文化財報告18 清水・寺山谷遺跡
[奈良]
奈良文化財研究所 飛鳥資料館
比羅夫がゆく 飛鳥時代の武器・武具・いくさ
[鳥取]
鳥取県埋蔵文化財センター青谷調査室
鳥取県埋蔵文化財センター調査報告46 鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡12
鳥取県埋蔵文化財センター調査報告47 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 8 木製農工具・漁撈具
鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要 4
青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2011
鳥取県埋蔵文化財センター
海を渡った鏡と鉄
三朝町教育委員会
三徳山歴史遺産調査報告書 第6集 名勝及び史跡 三徳山 発掘調査報告書Ⅳ
[島根]
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報20 平成23年度
浜田市教育委員会
島根県浜田市遺跡地図Ⅳ (弥栄自治区) 浜田城下町遺跡試掘調査
[岡山]
津山弥生の里文化財センター
津山城宮川門跡石垣保存修理事業報告書
津山城だより No.16
年報 津山弥生の里 第19号 (平成22年度)
[広島]
(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第56集 常納原遺跡
ひろしまの遺跡 第107号
ひろしまの遺跡 第108号
広島県立歴史博物館
広島県立歴史博物館展示図録 第45冊 ひろしまの城と戦ー中世山城から近世城郭へー
広島県立歴史博物館ニュース 第91号
広島県立歴史博物館ニュース 第92号
[福岡]
北九州市立自然史・歴史博物館
北九州市立自然史・歴史博物館研究報告 B類 歴史 第9号
九州国立博物館文化財課
細川家の至宝 珠玉の永青文庫コレクション
よみがえる国宝 守り伝える日本の美
平山郁夫 シルクロードの軌跡
契丹 草原の王朝 美しき3人のプリンセス
黄檗 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風
日本とタイ ふたつの国の巧と美
琉球と袋中上人展
横河民輔 コレクション
日本医術のことはじめ
九州最古の狩人とその時代
彫漆 漆に刻む文様の美

館蔵 水墨画 名品展
東風西風 九州国立博物館紀要 第6号
東風西風 九州国立博物館紀要 第7号
[佐賀]
伊万里市教育委員会
伊万里市文化財調査報告書 第53集 東田代筒江窯跡
[熊本]
熊本県文化財資料室
古代山城サミット 山鹿・菊池大会 講演会記録集
熊本県文化財調査報告 第268集 長山前田遺跡 両迫間日渡遺跡 1
熊本県文化財調査報告 第269集 熊本城遺跡群古城上段
熊本県文化財調査報告 第270集 新屋敷遺跡 1
熊本県文化財調査報告 第271集 二本木遺跡群(春日地区) 5 第6次・第14次調査
熊本県文化財調査報告 第272集 吉丸前遺跡
熊本県文化財調査報告 第273集 花岡古町遺跡
熊本県文化財調査報告 第274集 二本木遺跡群 6
熊本県文化財調査報告 第275集 吉丸西遺跡
文化財通信くまもと 第30号 平成23年度
[鹿児島]
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書166 上新田遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書167 陣之尾遺跡・陣之尾畠跡・上野畑遺跡・広段遺跡・北山田遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書168 北麓原D遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書169 稻荷迫遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書170 芝原遺跡 3
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書171 宮ノ上遺跡 鳴野原遺跡B地点
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書172 鹿児島紡績所跡 祇園之洲砲台跡 天保山砲台跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書173 宮ヶ原遺跡 野方前段遺跡B地点 柿木段遺跡 2
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書174 山仁田遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書175 外島遺跡
鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第58号
鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第59号

9 講演会要旨

(1) 秋季講演会

「地形から学ぶ土地の歴史—地理と考古 のコラボレーションの現場から—」

講師 久保純子 氏（早稲田大学教授）

はじめに



ご紹介いただきました久保と申します。早稲田大学の教育学部というところにおりまして、「自然地理学」を専攻しております。

地理学にもいろいろありまして、自然の他に、人間活動を中心とした経済地理や、歴史地理、文化地理学などもあります。私自身は自然を主な対象にしておりますが、人間が活動する場としての土地の特色や歴史などに関心をもっております。

今日は、地理学と考古学の間をつなぐような、そういう話をさせていただこうかと思えます。

先ず、今日お話しします概要ですが、最初に日本の人口のほとんどが集中している平野について、その特色をお話したいと思えます。

「平野というのは平らなところだろう」と思われるかもしれませんが、実は細かい起伏、凹凸があります。この細かな地形（微地形）に注目すると、その地域がどのようにできたのか、自然災害との関連を含めて、様々な特色がみられます。

微地形とは細かい起伏のことですが、その話をしてから、事例紹介として東京の下町低地をとりあげて、細かい地形からどういうことがわかるかを紹介したいと思います。

さらに、平野の微地形との関わりで海外の調査にも参加しております。カンボジアの地形と遺跡についても紹介したいと思います。

先ずは、平野という地形がどういうものかを知っていただき、その土地がもつ歴史を紐解きながら、そこに生活してきた人々の遺跡との関わりについて、ふれ

させていただきたいと思っています。

1. 日本の平野の特色と微地形

今日お話しする「平野」とは、「標高があまり高くない」そして「平らなところ」というもので、学問的に「平野は標高何メートル以下である」という決まりはありません。相対的に低くて平らなところが平野です。

日本列島は山地がたいへん多いです。中には火山も多く分布しておりますが、山地と火山、山地より起伏の小さい丘陵を含めると日本列島の4分の3を占めません。

その一方で、平野は、台地も低地も含めて、およそ4分の1ということになります。

山地や丘陵地や火山地などが多くて平野が少ないのに、この狭い平野部分に多くの人が生活をし、都市をつくり、生産活動も行っているということで、概算で8割ぐらいの人口が平野にあると言われております。

これを海外と比較すると、海外の大陸には真っ平らで、どこまでも平野が広がっているところがあります。日本でいちばん広い関東平野でもどこか端のほうに山が見えますが、大陸では見渡す限りの地平線に至るまで平らなところがあります。同じ平野とは言え、少し性格が違っていて、日本の平野はもともとどこほこしているところを埋め立てて平らになったという土地で、「堆積平野」あるいは「沖積平野」と言います。

それに対して大陸の平野には、削られて平らになったというものが多く見られます。アマゾン川が流れる広大な平野や東南アジアのメコン川のように、削られて平らになった「侵食平野」というものがあります。

また、日本のおもな平野というのはだいたい大きい主要な川沿いにあります。例えば、石狩川沿いに石狩平野があるとか、関東平野には利根川とか荒川とか江戸時代の川が流れ、新潟平野には信濃川や阿賀野川があります。また、海岸部にも見られます。山の中に盆地もありますが、おもな川や海岸沿いに平野があるということは、川が山から土砂を運び、海岸にまで流して埋め立てるというかたちで平野ができるということになります。

日本列島は世界の中でも、プレート境界地域にあたり、地殻変動の盛んな地域であるため、山は少しずつ

隆起、持ち上がる活動を続けています。一方、大きな平野があるところは、少しずつ地殻変動によって沈んでいく、という特色をもっています。

その結果、持ち上がったところは削られ、沈んでいくところは埋め立てられていきます。山を削り、運び、平野へ埋めていくという、「侵食、運搬、堆積」が川のおもな働きですが、このような河川の働きによってつくられているのがほとんどの日本の平野の特色と言えます。

高い山々の間の谷を小さな川が流れています。これが広いところに出てきて、円錐状の地形をつくることがあります。山を削った土砂が下流に運ばれて、平らになったところであとからあとから溜まっていくというのがみられるわけです。これを「扇状地」と呼びます。扇のような形で、山から出てきたかたちが扇のように広がってできた地形です。

その中には、水の流れが1本ではなく、幾筋かに分かれて、あいだに中州ができたり、河原が広がったりして、網の目のように流路が幾筋にも分かれたり、ついたりするのを「網状流」と呼びます。

山からは大量の砂利、土砂が運ばれてきます。このような砂礫が運ばれて積もり重なっていくので、扇状地は比較的急な勾配になるという特色もあります。

この扇状地でたくさん重い砂利を落としてしまうと、川は比較的身軽になりますので、大きな砂利は運ばず、小さな砂とか泥のみを運ぶようになり、水の流れる筋は1本にまとまってまいります。ただ、直線でまっすぐに流れるのは非常に少なく、多くの場合スイングするように、あちこちに曲がってS字を示すようになります。これをさきほどの網状に対して、「蛇行流路」と呼びます。

大きな砂利を落としてしまった後は、より細かい砂とかさらに細かい泥といったものが運ばれます。これが洪水になると、流路の両側にあふれます。この場合、砂や泥はまわりの両側にすぐに置いていかれ、水だけが遠くまであふれていきます。これを繰り返すことで川沿いにだけ砂や泥が積もって少し高い地形ができます。これを「自然堤防」と呼びます。ただし、人工的な堤防が5mとか10mの高さがある一方で、自然の堤防はせいぜい1m程度しかありません。

この自然堤防のさらに両外側は土砂が溜まらず、低くて平らな土地になります。この部分は、「川に向かって後ろのほう」という意味で「後背湿地」と呼ばれます。「自然堤防」と「後背湿地」という地形が、扇状地の下流より蛇行した川沿いに典型的にみられるようになります。また、先程の扇状地と比べますと、ずっと勾配がゆるいという特色もあります。

自然堤防と後背湿地の差は高さにして数十cmの違いしかないのでわかりにくいところがありますが、その土地利用においては後背湿地が田んぼで、自然堤防は畑とか家とか古くからの集落とか道路とかお寺や神社があるということで、明確な違いが見られます。平野の微地形はなかなか見つけにくいものですが、古くからそこに住んでいる人たちは土地の使い方を区別していたことがわかります。

さらに下流に至り、川が海や湖に注ぐと、空気の中より抵抗が大きくなります。最後には、いろいろ運んできたものも海や湖に入ったところで全部落としてしまう。落とされたものは川沿いに積もりませんが、流れも移動するので、最終的には半円形の地形ができます。先程の扇状地とは、内容が砂や泥であることや非常に平らな勾配であることが違ってきます。また、川の流れ方も、中州のできる網状流路ではなくて、こっちへ行ってもこっちへ行ってもあまり変わらないということで、同時に分かれて分岐して流れる「分岐流路」または、「デルタ」という言い方もよく知られていると思います。ナイルデルタとか木曾川デルタとか、そういうものも多くの場合川が複数に分岐して、網状じゃなくてそのまま分かれて海に出るような場合もよくみられます。こういうものがいちばん下流部にできる地形ということです。

平野の微地形というのは川がものを運んできて、上流から下流にかけてできていく地形ですが、デルタになりますと最後は海の影響も受けることがあります。東京の江戸川デルタの場合、東京湾の潮の干満が最大2mになり、引潮になると川の途中にも干潟が出てきたりします。

海岸では、鳥取砂丘や静岡県浜松中田島砂丘といった、砂が盛り上がった「砂丘」という地形がみられます。この砂丘は、海岸に打ち上げられた砂が風で飛ばされてできた地形です。ここでは風の働きが入っ

ていますので、遠くまではいきませんが、粒の揃った砂が残ります。

また、川の影響ではありませんが、海岸沿いに平行して縞模様が見えます。これは波打ち際に砂が打ち上げられて、土手のような少し高い地形が作られます。そのうち海岸がいろんな理由により、沖合に離れてしまい、少しずつ海岸沿いに打ち上げられたものが何列にもなっている。これを「浜堤列（ひんていれつ）」と呼びます。

このように平野と、特に川や海岸沿いの平地の部分というのわずかな起伏があって、それぞれ川の洪水や波の働き、風の影響などによって作られています。

このような地形は、現地で見ることできますが、飛行機から撮影した空中写真というのが全国で撮影されています。飛行機が上空を飛びながら連続して写真を撮ります。一部が重なっている2枚の写真を組みますと平面的な写真がステレオ、3Dの起伏をもって見ることができます。例えば、わずかな起伏しかない自然堤防や後背湿地なども写真で見ることによって、明瞭な凹凸として確認することもできます。現地を調査する以外に、写真の判読をして、細かい自然堤防や後背湿地、旧河道などの地形を調べることができるというわけです。

図1は1950年代に、私が早稲田大学で習った大矢雅彦先生が濃尾平野についてつくった図です。木曾川の中・下流域から名古屋の市街地までが含まれています。これを見ると名古屋城が台地の縁につくられていて、高台の見下ろすようなところにつくられているのがわかります。そのほかの細かな起伏ですが、木曾川が山から出てきたところでは扇状地が見られます。そこから下流は1本にまとまって蛇行して、その両側には自然堤防・後背湿地という地形が見られます。さらに、いちばん下流は三角州、デルタになっています。

その後、この図が注目されることになりました。作成の3年後に伊勢湾台風という戦後最大規模の被害を出した台風がこの地域を襲いました。4m以上の高さの高潮が、木曾川の河口地帯と名古屋の街を襲いました。そのときの被害、浸水があった範囲というのが、先の図に記された範囲と重なっていたことが明らかになりました。

当時の新聞には「地図は悪夢を知っていた」といっ



図 11.6 濃尾平野の地形分類図 (大矢, 1993より)
1: 山地, 2: 台地, 3: 扇状地, 4: 自然堤防, 5: 後背湿地, 6: 三角州, 7: 堤防, 8: 河川, 9: 感震限界

図1 濃尾平野の地形分類図

て、地形を分類した結果と洪水の被害範囲とが一致し、たいへん注目されました。一見平らな平野ですが、このわずかな地形の違いが、この場合は高潮の水害の違いをはっきりさせたということで防災の面で注目されました。

また、この木曾川の扇状地から自然堤防・後背湿地を経て三角州に至る地域は、古くから「輪中地帯」として知られています。自分達の村のまわりを堤防で囲んで水害から守るというもので、中世頃には小さな単位で、ひとつひとつを輪で囲んで「輪中」という生活共同体あるいは水防共同体がありました。ただし、中小の洪水は自分達の堤防で守るけれど、大洪水になると守れないという場合に、屋敷地の一角に高い盛土をしてその上にお蔵を建てる「水屋」とか「水家」というものもあります。

洪水のときに母屋が浸水してもこの蔵は高くしてあるので、ここに食料あるいは種籾とか大事なものを備えておく水防倉庫として、また戸のところには舟を吊るしてあったりするといった、水害常襲地帯の風景がこの輪中地帯には見られます。



図5.4.6 東京低地地形分類図 [久保, 1993]

図2 東京低地地形分類図

実はこの輪中においても、少しでも高いところに堤防を築くために、自然堤防を利用していたことが分かっています。

2. 東京低地の微地形と遺跡

次に東京の平野の微地形をテーマにして、考古学との関わりを紹介させていただきます。

東京は西側が山の手の台地で、標高は20から30mほどと少し高くなっています。それに対して、東京駅や浅草、東京スカイツリーなどのある東側は下町の低地と言います。こちらの標高は5m以下です。このように、西側の台地と東側の低地からなるのが東京の中心部ですが、今日は東側の低地部の話をしていきます。

この東側の低地部を「東京低地」と地形上呼んでいます。西が武蔵野台地、東は東京低地と呼ばれ、川がいくつか流れ、東京湾に注ぐところにあたります。また、千葉県側は「下総台地」と呼んでいます。

まわりに武蔵野台地、下総台地、大宮台地など標高20mほどの少し高い土地があって、その間の低い土地が東京低地になります。周囲には隅田川や荒川、江戸川などの川が流れています。その海岸部は非常に人工的な形をした埋立地になっています。お台場とか羽田

空港などがあります。さらには「東京ゼロメートル地帯」という海面よりも低い土地が広がっています。堤防で囲い、水門もあって水が来ないようにして人が住めるようにしています。

古い空中写真や古い地形図によると、この東京低地でも微地形がわかります。その結果をまとめたのが図2になります。

まず、海岸部には人工的に土砂を入れてつくった埋立地があります。お台場や有名な東京ディズニーランドも埋め立て地です。去年の大震災で非常に被害の大きかった浦安市も、住宅地ですが、この埋立地にあります。

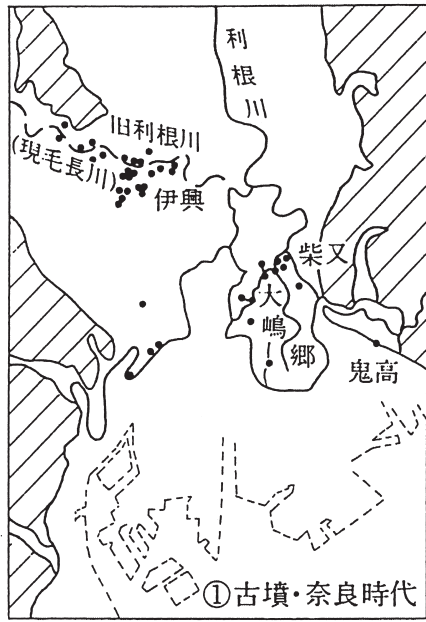
その周辺には干拓地もあります。干拓地というのは、堤防をつくって水を排水して、もとの海底だったところを地面にした地形です。佐賀県の有明海やオランダのポルダーが有名ですが、東京にもあります。

いくつもある川の流域には自然堤防などの微地形も見られます。また、現在の東京駅があるところは砂州で、海岸の波打ち際にできた地形の上に立地していることがわかります。

現在は、海岸が埋立や干拓によって改変されたように、河川にも人間の手がかえられています。例えば低地の中に荒川という大きな川がありますが、実は全部人工の川です。このように人工的な川がいくつもつくり、海岸部には埋立地がつくれる。内陸部も、江戸時代の新田開発に代表されるように、湿地帯だったところを干拓したりと、低地は人間が手を加えて現在の姿になっているということが言えます。

この周辺には現在、隅田川、荒川、江戸川などが流れていますが、これは江戸時代の初め、徳川幕府の最初のころにかなり手がかえられています。現在の利根川は千葉県の銚子のあたりを流れていますが、もとの利根川は実は東京湾に流れていました。台地の部分を削り、ほかの川と繋ぎ合わせたりして、流路を変えるというような付け替えとか瀬替えとか呼ばれていたことが行われていました。荒川も実は元荒川という川があって、利根川と合流して東京湾に注いでいました。これも川の付け替え、瀬替えが行われて現在のようになったといわれています。

干拓や埋め立て、川の付け替えというようなことは



(・主な遺跡)

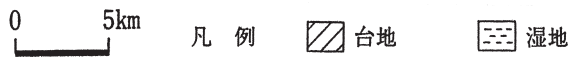


図5 東京低地の地形 水域の変化 古墳・奈良時代

わかります。

例えば、足立区の伊興（いこう）遺跡ですが、古墳時代の集落遺跡として知られています。ここは、かなり重要な拠点集落とされていますが、ここも微高地の上にあります。隣接して、昔の川のあと、旧河道もみられることから、この時代は大きな川の河口付近で、ターミナルみたいな位置づけがされていたと考えられています。

また、浅草寺も地形的にはやはり微高地になります。隅田川も、かつての利根川のデルタの分岐のひとつだったと言われています。

汐留は、ここも砂州のあったところで江戸前島と呼ばれていました。江戸時代の大名屋敷があって、間にお堀がありました。その後、明治期には新橋駅がつくられ、現在は当時の場所に復原されています。

東京低地においては、古く縄文時代には貝塚の分布から、海が内陸に及んでいたことが明らかになっていました。しかし、そのあとの変遷が実はあまりわかっていませんでした。

微地形と遺跡の分布図を調査することで、古墳・奈良時代頃からのデルタの上に正倉院の戸籍に出てくる

村が出現し、川沿いには古墳時代の集落が営まれたことが遺跡の調査で明らかになってきています。その後中世になると、利根川がさらにデルタを広げていた様子や、江戸時代には河川の改修など、だいたい人間の手が加わり、20世紀には埋立地もできてきました。

このように微地形を手がかりにすると、先史時代から歴史時代までのその土地の変化を知ることができるという紹介でした。

3. カンボジアの遺跡調査

平野の地形と遺跡に関するもう一つのお話は、ここ数年調査を続けているカンボジアの遺跡についてです。カンボジアの遺跡と言えば、有名なのはアンコールワットです。アンコールワットは日本の平安・鎌倉・室町時代に続く大きな遺跡ですが、これに次ぐ規模の遺跡も、実はカンボジアの各地に分布しています。

ここで特徴的なのはモンスーン気候ということなのです。毎日雨が降る雨季と1年の半分は雨が全然降らない乾季があります。その結果、1年の半分は湿った土地が広がり、1年の半分はサラサラになります。雨季には川があふれることもあります。例えばトンレサップ湖という大きい湖があります。地図に書かれているトンレサップ湖というのは、乾季のいちばん小さいときのもので、雨季には3から5倍に拡大します。

有名なメコン川も、雨季になるとこの平野のかなりの範囲が浸水してしまいます。洪水の出方が日本とは違い、日本だと大きな洪水でも数日間の浸水ですが、こちらは1、2ヶ月ずっと浸水しているという状況です。去年、東南アジアのタイのバンコクで洪水があっ



図6 カンボジアの遺跡分布

て、日本の企業がすごく被害を受けましたが、カンボジアでも数週間、洪水が続きました。

カンボジアといえばアンコール遺跡ですが、これは12世紀前半にスーリヤヴァルマン2世によってつくられたヒンズー教のお寺です。江戸時代の寛永9年に日本から参拝客が行って、その落書きが残っています。

アンコールトムのバイヨン寺院も知られています。顔が4方向にある世界でも珍しいお寺で、12世紀後半、ジャヤヴァルマン7世によってつくられました。この王様の時代に最も国土が広がったとされています。

また、タプローム寺院は日本人にもいちばん人気のあるところでしょう。木がからまっていて、ものあわれを感じます。

これらの遺跡、寺院は皆、トンレサップ湖の北側にありますが、カンボジアのほかの地域では私ども早稲田大学が中心になって調査をすすめている遺跡があります。アンコールからは約200kmのところにあります。

それはサンボープレイクックという、アンコールワットより500年ぐらい古い時代のヒンズー教の寺院です。日本では大化の改新や聖徳太子のころに当たります。当時、中国の隋の歴史書にこの国の名前が出てくるので、その都だと言われています。内戦が終わり、ようやく調査が進むようになってきたところですよ。

ここで私は空中写真による調査を行いました。これを見ると、ここは森のなかにお寺があり、南側には川があって、その間が氾濫原、洪水の起きるところになります。中には、お寺の参道、道みたいなものや、当時の都のお堀の跡というものがわかってきました。このように写真である程度わかってから、現地調査をすることができました。

最初はGPSを使って何がどこにあるかを示す地図づくりをしました。その後、空中写真を使い、低地の部分では川が蛇行し、自然堤防もあって、台地の部分では谷ができるといった地形分類図ができました。これをみるとおまなお寺や都は台地のほうにあって、こちらの氾濫原の低地のほうには道が残っていたり、溜池が数多くあることもわかりました。

今回で10年ほどになりますが、早稲田大学と現地の役所と一緒に調査を行っていて、建物の実測や部分的な発掘調査や地質のボーリング調査もしています。私どもが参加したのは、遺跡のリストを作成し、GPS

でその位置図をつくることでした。また、遺跡の保存・修復計画の策定や周辺の村への支援なども進めています。

中国の隋の文献には出ていますが、発掘調査などによって年代を確認する必要もありました。これはいちばん最新の発表内容ですが、道路工事によってできた土層断面を調べると、土器や炭が見つかり、年代をはかることができました。上のほうからは13世紀ぐらい、下のほうからは5～6世紀ぐらいの年代が出てきました。プレアンコール時代にはすでに何かつくられていたということがわかっています。

それから、土そのものを調べた成果ですが、氾濫原のほうでは、1年の半分あまりが水浸しになることがわかりました。川沿いのところは、川が削ったり埋めたりして入れ替わりが激しく、またさらにその両側も、後背湿地にあふれていた泥や、粘土が溜まるようなところでした。台地と比べると不安定な土地といえます。今後、都がつくられていた土地も含めて、広範な自然環境について、もう少し詳しく研究してみたいと思います。

また、今は田んぼをつくっていますが、田んぼの水をどのように手に入れ、使っていたかをも明らかにしたいと思っています。溜池が多くあるのがわかっていますが、この溜池が使われていたのかななども含めて、利水の方法についても研究をしています。

当時の都の立地や運河などの利水システム、なぜアンコール王朝に移行することになったのか、政治的理由なのか、何か自然環境の影響なのかなども含めて今後の研究課題にしていきたいと思っています。

まとめ

今日の話をもとめます。

日本の平野は川の流れの堆積によってつくられたものですが、それによって扇状地や自然堤防、後背湿地、三角州といった微地形が現れます。

これらの微地形を手がかりにして、東京低地での事例をご紹介します。あまり文献がなくて、よくわからなかった中世・古代の様子も、微地形を手がかりに、ある程度見えてきました。

それから、カンボジアの遺跡調査でも、微地形を手がかりにして、どういうところに都をつくったのか、

人々の水の使い方や災害対策などを明らかにしていきたいと思います。また、今後は遺跡保存と観光との問題もあり、これは多くの人に協力いただきたいと思っています。

質疑応答

(質問者)

今日はどうもありがとうございました。今日のお話とは反対側の台地部の東京のことになりますが、中沢新一先生の「アースダイバー」という本についてどのようにお考えかお聞かせください。

(久保)

中沢新一先生は人類学者で有名な方ですが、東京の山の手の地形に注目されて本を書かれています。これによって多くの人が東京の地形について、坂や様々な起伏、すり鉢状の地形などを通して注目されるようになりました。やはり東京で注目されるというのは地形

そのものだけじゃなくて、そこに住んでいる人の歴史とか、ものの考え方と絡みあわせて考えるというのがおもしろいと思います。私自身は地形のほうが中心ですけれども、そういう歴史や民俗との関わりは勉強したいなと思います。ありがとうございます。

図の引用文献

図1 大矢雅彦『河川地理学』古今書院 1993年

図2 貝塚爽平ほか編『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 2000年

図3・図5 大矢雅彦編『防災と環境保全のための応用地理学』古今書院 1994年

図4 小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 2001年

図6・図7 久保純子ほか「サンボープレイクック遺跡の地形・考古層序・年代」早大大学院教研紀要22 2012年

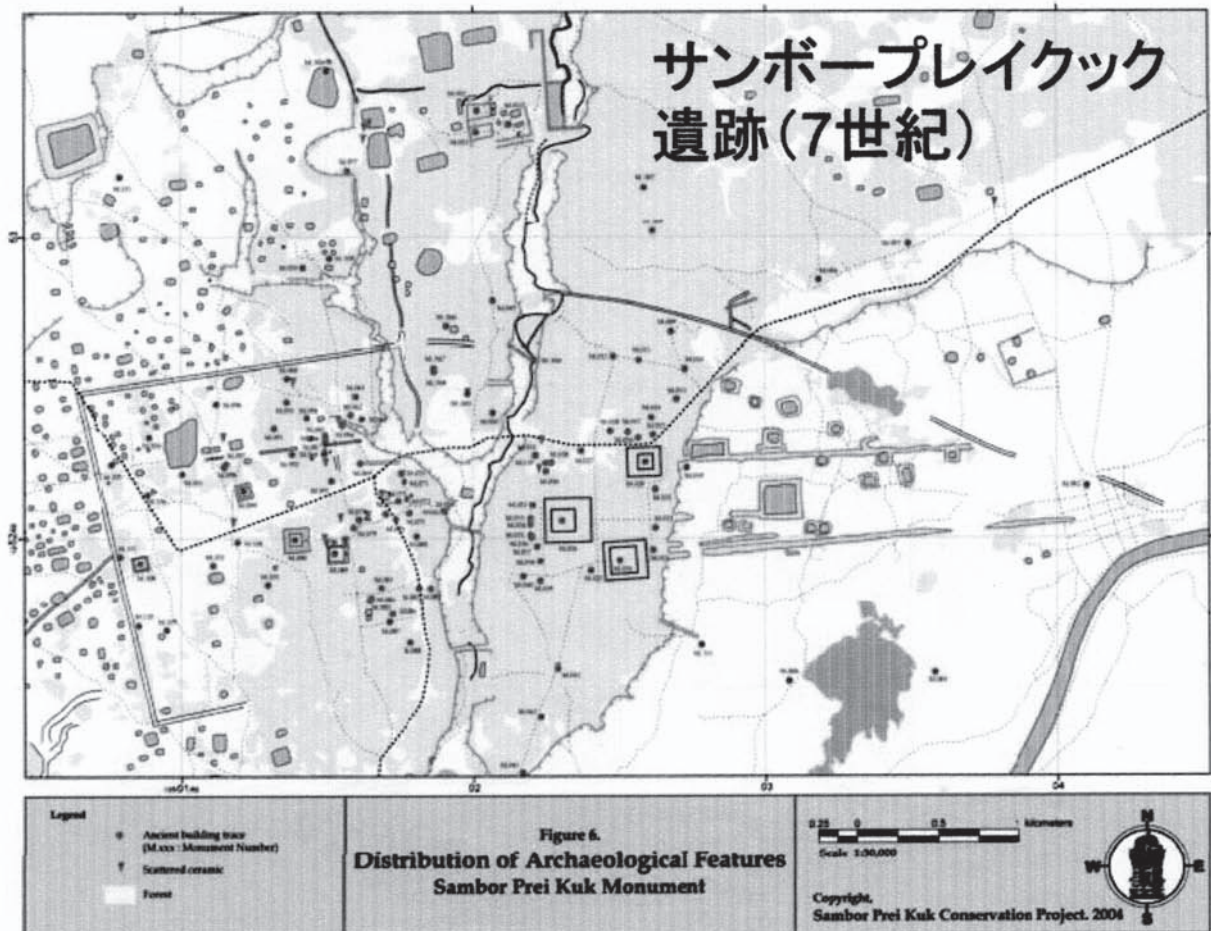


図7 サンボープレイクック遺跡

(2) 春季講演会

「ほっかいどう発掘ものがたりvol.1」

講師：加藤邦雄 氏(元札幌市市民局文化財課長)

【はじめに】

今日も講師紹介にもあったトレードマークの白いタオルをさげている（会場に見せる 笑いがもれる）。これは学生時代からの習慣で、これを忘れると、1日何か力が出ない感じがする。後ろから見て、白いタオルを腰から下げている男をみると、「あれは加藤だ」と思っていただけで間違いない。



【私の職名と発掘調査の種類】

市町村教育委員会などで発掘調査に携わっている方は、博物館や郷土館、資料館などの学芸員として任用されていることが多い。札幌市には博物館がないため、私の職は事務職員だった。そのため、大学の先生や学芸員のように、研究などのための発掘を行ったことはなく、一貫して行政調査に携わってきた。

【遺跡と埋蔵文化財】

皆さんは、「遺跡」という言葉は、よくご理解いただいているだろう。しかし、「埋蔵文化財」という言葉は、あまり聞くことがないのではないか。例えば、家の庭から土器や石器が出土して、「あなたの家は、遺跡だったところなのですね」というと、ロマンチックな感じをうけ、昔の人の生活を想像したりもするだろう。それが、事情が生じ、家を売却することになる際、「我が家は、埋蔵文化財の上に建っている」となると、これは一大事。建設業者の方々から見ると、埋蔵文化財は大変嫌われる存在となっている。

細かい点で相違点はあるが、「遺跡」と「埋蔵文化財」は概ね同じと考えて頂いて結構である。

【埋蔵文化財包蔵地と周知の埋蔵文化財包蔵地】

埋蔵文化財の埋まっている土地を「埋蔵文化財包蔵地」という。文化財保護法には「周知の埋蔵文化財包蔵地で工事などを行う場合には、届け出を行わなければならない」と書かれている。

周知とは広く知れ渡っているという意味で、都道府県教育委員会の遺跡台帳に登録されている遺跡のことを、「周知の埋蔵文化財包蔵地」ということになっている。

【記録保存と現状保存】

「周知の埋蔵文化財包蔵地で、やむをえず工事を行う場合には、遺跡の内容を記録に残すという「記録保存」の発掘調査を行う。遺跡を今の状態で残す「現状保存」は、もっとも望ましい方法だが、すべてそうするというわけにはいかない。

【2種類の発掘調査】

北海道には、「周知の埋蔵文化財包蔵地」が、約1万2千カ所ある。これをすべて現状保存していくと、現在生活している皆さんが必要としている施設などを作ることができなくなる。そのため開発行為の際、記録保存を行っている。このような業務に携わっているのが、私たちのような埋蔵文化財担当職員である。

発掘調査にも2種類あり、一つが大学の先生や研究機関職員、学芸員などが研究などの調査目的を持って行う学術調査で、もう一つは記録保存のための発掘調査で、現在行われている発掘調査のほとんどが記録保存のためのものである。

【原因者負担】

それでは、そのお金はどこから出ているのか。それが原因者負担という考え方で、利益を得るものが負担するというもの。昭和41～46年に、住宅公団や鉄建公団との間に覚え書きが交わされた。この前段が、昭和30年代からオリンピック開催に合わせて新幹線や高速道路を整備するときに行われた発掘調査が原因者負担のはじまりのようだ。

[分布調査と試掘調査]

分布調査は、遺跡を護るために最も大切な調査といえる。どのような遺跡がどこにあるのか、ということ調べていくことを分布調査という。また、どのような地層か、どの時代の遺構、遺物が埋まっているかなど、遺跡の内容を確認するため、試掘溝を掘って調べることを試掘調査という。

[今日のお話の真実は30%]

今日のお話の真実は30%くらいしかない、という皆さんは少し驚かれるかもしれない。これは初めにどなたがいったか定かではないが、現在も現役でご活躍の有名な考古学者の祝賀会に出席したときのこと。司会をされていた先生が、「老人が昔話をはじめた時には、その方の年齢分、割合を差し引いて聞くのがよい」とおっしゃった。そうすると、私は今年の8月で70歳になるので、70%差し引かれ、30%しか残らない。その30%の話の中に、10%くらいはホラ話が入り、10%は愚痴が入るかもしれない。そうすると、真実は10%くらいしかないのかもしれない。そのへんをお含み置きいただきたい。

[日本語が正確に話せない]

齢を重ねると、だんだん日本語が正確に話せなくなってくる。というのも、だんだん自分より年上の方と接する機会が少なくなり、また、退職して、他の方々とお話しする機会も少なくなる。そうすると、敬語などを使用する機会がぐっと減ってしまうのだ。こうやってお話ししていても、「皆さん、聞きましたか？」のように、失礼な言い方をする場面があるかもしれないが、お許しいただきたい。

[もはや戦後ではない（「三丁目の夕日」世代）]

私の前後世代は、「もはや戦後ではない」世代。今のはやりでいうと、「三丁目の夕日」世代と言い換えても良い。

私は当別町に生まれた。現在は家の前に国道337号線があるが、当時は大変な田舎で私が物心つくまで家に電気がなかった。小さい頃は、ランプの

ホヤ磨きなどを家の手伝いでやっていた。

こんなお話をすると、「貧しい家にうまれたんだなあ」と思われるかもしれない。決して貧しくなんてありません（笑）。

というのは、私が大物になっていません（笑）。人間、大物になると、「今でこそ、この生活があるが、小さいころは、貧しくて、非常に苦勞をした」という自慢話もできるが、私は、残念ながらそうではありません。私みたいな小者の場合、「それはお前が努力しなかったからだろう」と言われてしまうのがオチ……。

私の家は、幹線道路から150mほど入ったところだったため、電気をひくためには、一軒で電柱の敷設代を負担しなければならなかった。電柱を敷設する代金を払えなかったのだから、貧しかったのだろう（笑）という意見もあるかと思うが、小学校に上がる際は、ランドセルも買ってもらっているし、入学記念写真も写真館で撮影し、それが残っているので、決して貧しかったというわけではない。また、お米づくりの農家だったので、食うに困ったという経験もありません。

[小・中学校の頃]

学校は、同級生が8人の複複式学級だった。3学年が一緒に授業を受けるスタイルで、毎日学校で受けている授業そのものが、予習と復習を兼ねているようなもの。5年生が授業をやっていて、わからないことがあると、まず、6年生に先生が答えさせる。「この話は、去年勉強したはずだぞ、覚えていないのか」などといっている横で、4年生が答えてくれたり。そのおかげで、学校以外で勉強したという記憶は一切ありません。こうして同級生8名のなかでガキ大将として育ったことが人生の転落のはじまりだったかもしれない（笑）。

中学校にすすむと、そこは全校生徒が300名くらいの大きな学校。田舎から来たちょっと小生意気なガキは、いじめの標的になった。

そこでおとなしくしていればよいのだが、子供の頃から体力的には弱い方ではなかったので、対抗していった。そのような勢力に対抗するために、体力だけではなく、口でもいい負けな屁理屈を

こねるようになった。そんなこんなで、中学でも、いじめ勢力に打ち勝ち、やはりガキ大将的な立場で過ごしていくようになった。

中学を卒業すると、周りの友人たちは家業の農家をついで、お百姓さんになっていた方が多かった。私の親は、兄弟3名、それぞれを農家として独立させるだけの土地や資金はありません。

そこで、「高校へでも行って、次のことを考える」というので、進学先を考えることにした。

その時代は、春と秋に農繁休暇があり、春は田植え、秋は稲刈りに伴うお手伝いをしていた。その他にも、牛、馬、鶏などを飼っていたため、日頃からその世話もしなければなりません。町の子供が、予習復習や補習を受けている間、私は、家業の手伝いをしていたわけで、「いける高校もないなあ」と思い悩んでいたところ、新設の札幌旭丘高校は、進学できそうだという情報を得て、そこに入学することにした。ところがこれまた、間違いのもとだったのである……。

[高校生の頃（札幌旭丘高校）]

入学した札幌旭丘高校は、今でもそのような校風だと聞いているが、ちょっとお上品な学校だった。私とは肌合いが全く違う。組に農家の子供は私以外一人もいない。

夏は2時間かけて当別から汽車通学、冬は札幌市内に下宿。これは当時の不良になる二大要因を満たしていた。この条件を満たしていて、よく道を踏み外さなかったものだと思っている……。

高校時代は、先生によく、「おまえは、勉強しすぎだよ。勉強のしすぎはろくなものにならない」といわれた。私が熱を入れていたのは、社会勉強の方で、先生は学校の勉強も、もう少し頑張っしてほしいというつもりでいていたのだ。

大学への進学もあまり考えていなかったが、当時の札幌は人口60万人ほどの田舎町だから、都会にいつてみたいという願望があった。当時の札幌は、冬になると、テレビ塔のてっぺんだけは見えるが、あとは煤煙でなにも見えないという状況だった。

そんな中、親に大学へ進学したいというと、運

良く許可がでたので、どこか合格する大学はないかと探すことになった。

高校に立正大学を卒業された地理の先生がいた。この先生は、博学な方で、どこに湧水があるか、どこにどんな坂があるか、など、札幌のことをなんでも知っていた。こういう先生が学んだ大学なら良いだろうと思い、立正大学への進学を決断した。これが考古学に係っていくはじめとなる。

[大学入学（立正大学）]

私の頃の考古学をやる人は、子どもの頃から土器や石器を拾い、遺跡巡りをするなど、興味をもった方が多かった。私は、考古学という言葉もよくわかっていないような状況だった。ただ、街の社会勉強と同じくらいに、歴史を学ぶことは好きだったので、文学部史学科に進学したのだ。

史学科で新入生説明会があり、そこでクラブ・研究会紹介が行われ、その中に考古学研究会が含まれていた。考古学は、体はしんどいけれども、作業が終わった夜は、お酒がでると聞いた。現在なら、いろいろ問題もあるところだが、昔は大学生になると、そのあたりは寛容な部分があった。しかも、目いっぱい好きなだけ飲んでもよいという。その言葉につられて、研究会に入会した。

[立正大学考古学研究会]

研究会に入会すると、いきなり5月から千葉県松戸市にある弥生時代の集落遺跡の調査に連れていかれた。当時は、重機を使わず、すべて人力で調査を行っていた。一輪車も使用していなかった。

関東の発掘では、黒土を下げると、その下の関東ローム層に竪穴住居跡のくぼみを確認することができた。竪穴住居跡は、一辺が6～7mあり、その範囲の表土をすべて除去しなければいけない。それが一年生の役目だった。

表土を除去したところで、上級生から声がかかる。「はい、一年生は次のグリットで表土剥ぎ」。遺構調査は、上級生の仕事で、一年生はまだ掘らせてもらえない。次のグリットの表土剥ぎが終わるころ、上級生の遺構調査もちょうど終わる。「では、一年生は調査の終わった遺構の埋戻し」。こ

れだけみると、単なる肉体労働者の様相だ。

ところが、私の場合には、中学3年生の時には、米1俵（63kg）を持ち上げられるほど、幼少時より農家の手伝いで体ができあがっていたので、「お百姓さんの仕事に比べたら、まだ遊んでいるようだなあ」と余裕をみせていた。そこで、先輩たちに重宝なやつだと目をつけられた。

その当時の発掘調査は、ほとんど自炊をしていた。私は子供の頃から炊事の手伝いもさせられており、ご飯を炊くのが上手だった。10人分、20人分と炊ける直径1mほどの大きな羽釜でも、難なく炊くことができた。

そのためか。毎朝4時くらいになると、先輩に起こされた。「今日は私の当番の日ではなかったはず・・・」とっていると、「おいしいご飯が食べたいから、加藤がご飯だけ炊くように」と。

そのかいあってか、考古学研究室の発掘調査には、加藤を連れて行くように、と必ずお声がかかるようになった。メンバーの選定は、先輩方が行っていたのだが、体力があり、ご飯炊きが上手だったことが大きくプラスに働いていたようだ。

[高度経済成長時代の発掘調査]

昭和30年代後半には、高度経済成長時代になった。開発行為で行われる調査、いわゆる緊急調査が多くなってきた。私が在学していた立正大学は学生数が多かったことで、そうした開発行為の発掘調査があると、研究室が主体となり調査を行い、そのほとんどに参加した。

八王子市、町田市、日野市など、住宅公団が多摩丘陵に大型団地を建設するための発掘調査に従事した。多いときには、年間100日くらいはそのような調査に出ている。それほど裕福な学生ではなかったが、私はアルバイトの経験がありません。発掘調査にいくと、アルバイトをしているのと同じような状態だった。研究室の行う学術発掘は、相変わらず自炊で、まだお金をもらうような形ではなかったが、現場にいて泊っていれば、3食ご飯が食べられて、夜はお酒が飲み、宿が用意された。どうしても欠席が認められない講義は、現場から直行していた。このような毎日のおかげで、

生活費がほとんどかからなかった。

1年生のうち、幅1mのトレンチ掘りや表土除去が主な仕事だったが、このころになると、関東の発掘調査にも一輪車（通称ネコ車）が使われるようになった。このネコ押しでも、誰にも負けません。11月、12月でも上半身裸で、湯気を立てながら走り回っていた。現場を見学に来た1年生の母親が、「こんな厳しい環境に自分の子供を置いておくことができない」といって、連れて帰ってしまったというエピソードもできた。実にハードな発掘調査の毎日だった。

そんな形で始めた発掘調査ではあるが、3年生、4年生と上級生になるにつれ、竖穴住居跡やお墓などの遺構調査にも関わらせてもらえるようになった。

[いなかのガキ大将から少数派]

田舎の中学から旭丘高校へ進学したのは、2名しかいません。旭丘高校から立正大学へ進学したのも3名。しかも、それぞれ違う学部に入學した。

立正大学の考古学研究会は、私より4つほど年上の方々が始めたもので、全国各地をみても先輩がほとんどいなかった。北海道には、かなり年配の方が2名だけで、明治大学や國學院大学の卒業生などが分厚く布陣されていた頃だった。

現在に至るまで、ずっと少数派ばかりだったがために、少し理屈っぽい人間になってしまったのかなあ、と想ったりしている。

[青年期におけるわずかばかりの心残り]

青年期において、わずかばかりの心残りがある。

私たちの少し上は、60年安保の世代だった。60年安保の時、私は高校2年生。高校は厳しかったので、デモに参加してはいけないということで、デビューすることもなく終わった。

70年安保とその後の学生紛争のときは、すでに大学を卒業してしまっており、かかわることがなかった。そのような環境だったため、どちらかというとノンポリ的な学生として過ごしてきた。

[成り行きの人生]

大学時代まで成り行きで生きてきたようなところがあるが、その後の人生もまた、成り行きに左右されたといえる。

大学4年生になると、周りにはみな就職活動をはじめたが、私は、結局就職活動をしなかった。

というのは、4年生の8月頃、主任教授から「君は卒業してから、何かやることはあるのか」と聞かれた。当時は、考古学専攻を卒業しても、博物館の学芸員か、学校の教員になるか、という道くらいしかありません。博物館の数は少なく、北海道の有名な博物館には、すでに学芸員が配置されていた。教員も、日本史の先生はほぼ定員に達しているのです、どこもとってもらえそうにない。ということで、「いえ、特に決まっておられません」とお返事したところ、「では、奨学金をとってあげるので、大学院に進学しなさい」という言葉をかけていただくことができた。

[大学院へ進学]

大学院に進学後行っていたのは、発掘調査における学生の棒頭のような仕事だった。

大学の研究室で町田の百草団地の調査を引き受けていたので、学生の棒頭にびったりで、あいつを入れておけば、現場は任せておけるということだったようだ。

[「ホトケの加藤」]

大学院の頃、一時「ホトケの加藤」と呼ばれたことがある。仏様のようにやさしい加藤では残念ながら（笑）、ホトケをつくる加藤という意味合い。加藤の下で発掘をすると、体力的にきびしくホトケになってしまうという伝説ができたためだ。私自身は、仏様のようにやさしい加藤を、みなさん勘違いしていただけだと思っているのだが。

[ネパールの調査へ]

大学院に進学後、大学でネパールの調査を行うことになり、団員にと、私にも声掛けがあった。10名中、最年少の団員で、運転手、兼炊事係、兼機械器具の手入れ係という役割だった。農家に生

まれ育ってやってきたことが、ここで生きたのだ。

最初に到着したカルカッタは、「カルカッタを経験すれば、世界中どこでも生活できる」という言葉があるが、それくらい混沌とした街だった。

日本から発掘機材を送ったが、通関に2か月以上もかかった。その間裏町の隅から隅まで、現地の人々が「そんなところを行くとあぶない」といわれるようなところまで、調査にいった。その点では、私の性分にはあった、とても良い街だった。カルカッタから西へ700キロ、車で20時間くらい、ガンジス川の沐浴で有名なベナレスという街に着いた。そこで1泊して、そこから北に500キロ。車で12時間。ジープを運転し、トラックを引き連れて移動した。カルカッタから約1,200キロ、それでも海拔約100mの平原である。この調査の内容は、大学から正式な報告書が出ている。カピラ城というお釈迦様が出家するまで住んでいた場所で、玄奘三蔵も記録を残している城跡の調査だった。

私は炊事係兼運転手で、まず炊事はどうやっていたか。水は近くの川で汲んでいた。その川は結構大きな川で、そこから300m上流にはその地域の火葬場があり、毎日のように火葬が行われていた。薪をたくさん買える人は、遺体もしっかり焼けるのだが、貧しい人たちは、薪を多く買うことができなため、遺体が焼け残るものがあり、それをそのまま川に流していた。川に流すと、カラスや犬が川からそれを引き上げて、食い漁る。そのような川の水を使って、ご飯を炊いていた。最初のうちは抵抗もあったが、そのうち、「今日もカルシウムがいっぱいだなあ」などと、話をしながら食事ができるようになっていった。最初は「どうしよう」と思うような生活も、だんだん慣れてきて対応できるようになった。

ネパールの考古学は、イギリス仕込みなので、考古学のofficer、写真技師、測量士がいて、事務係、コックさん、運転手さんと、それぞれの職務を務める人がいて、ひとつのパーティーをなしていた。

私は、コックであり、運転手であるという立場だったので、ネパール隊の運転手さんが大変私に

なじんでくれた。夜になると「カトウさん」と片言の日本語で声掛けされて、お酒を持ってきてくれて、一緒に飲んだ。

2年目、3年目となると、私も大学院を修了していたので、考古学的な仕事も多くなっていく。すると、くだんの運転手さんがやってきて、「日本はいい国だ」とおっしゃる(実際には、お互い、ネパール語とヒンディー語と英語を混ぜながらお話をするので、流ちょうな会話ではない)。

彼がいうには、「おまえは最初運転手だったのに、今では考古学のofficerだ。おれは一生運転手だ。日本はいい国だなあ」というのだ。

その彼をしても最後まで私を理解できなかったのではないだろうか、と思うことがある。

食事の中心は肉で、マトンの連続になる。そうすると、先生方の中からも、「そろそろ鶏肉を食べたいなあ」という贅沢な声があがってくる。

そこで私は、村を訪ねて、鶏を仕入れてきて(当別の農家は、自分の家で鶏をさばいていたので、私にも心得があった)、なんなくさばき、おふるまいをしていた。

ところが、ネパールでは、そのような作業を行うのは、カーストに定められた特定階級の人で、多くの人が行うことではなかったのだ。考古学の調査員や運転手が、鶏をさばくとは、全く理解ができないようであった。

3年目になると、ネパール隊のofficerに呼ばれ、「運転手は我々とは違うのだから、一緒にお酒を酌み交わすようなことをしてはいけない」と注意された。カースト制度の中で、階級が違うのだから、それほど仲良くしてはいけないという。文化の違いを強く感じた瞬間だった。

[研究室の退職と調査旅行]

こんな感じで3年間、調査に通った。最終年には、インドの考古学局からネパール考古学局に指導に来ていたアドバイザーが、お釈迦様誕生の地ルンビニーの発掘を行っていた。その方は後にインドの考古学局の局長になるが、大変気さくな方であった。私は現場の後片付けをしながら残っていたので、少し時間に余裕があったので、この人

に呼ばれ、調査の手ほどきを受けた。

3月にネパールにいるまま大学を退職するという話をすると、せっかくだからインドの博物館などを回ってきなさい、と、って、州立博物館などの館長や大学の教授宛に紹介状を書いてくれた。それを頼りに2か月ほど旅をして回った。

[『インドでは何も考えなかった』]

堀田善衛さんという方が、『インドで考えたこと』(岩波新書、1957)、椎名誠さんが『インドでわしも考えた』(集英社文庫1988)を出版されているが、それに倣っていうと、加藤邦雄は『インドでは何も考えなかった』になるだろうか。

インドの発掘現場は、電気も水道もないような、のどかなところ。インド国内の移動も、3時間列車に乗れば着くような場所も、3時間以上列車が遅れてくる。そのようなところをのんびりと旅をして歩くことは、成り行きで過ごしてきた私の性分に合っていた。

発掘現場でも、作業員が「今晚うちに遊びにこい」といったら、ほいほい遊びに行ったり。

どちらかというと、勉強をするよりは、見聞を広める方に力が入っていた。

[北海道の調査へ]

インド各地での見聞旅行も終え、日本に帰ってきた。

大学を辞めるが定職なく、国内でいろいろ見聞を広めていると、「何もすることがないなら、北海道に来て、おれの調査を手伝え」といってくださったのは、石附喜三男先生(故人)だった。羽幌町チライベツ遺跡と標津町伊茶仁遺跡を調査したが、これが北海道で発掘調査を行った最初。

東京にいるころは、いずれ北海道に帰ることがあれば、北海道のものしか発掘することはないだろうと思い、できるだけ本州の調査に参加するようにしていた。須恵器や瓦を焼いた窯跡、国分寺、古墳、城跡など、あらゆる時代のあらゆる遺跡調査に参加し、北海道では、掘ることのできないものを掘るようにしていた。

北海道で最初に調査した2つの遺跡は、擦文時

代の集落跡で、堅穴住居跡を掘ることが中心だった。住居の構造は、本州の奈良・平安時代のものほとんど同じだったので、調査することに困ることはなかった。

[北海道での大規模調査]

昭和47年札幌市に来ることになるが、それまで、函館で発掘調査をしていた。この発掘調査は、私にとっても思い出深い。

「函館で、北海道ではじめての大規模調査が行われるので、お前もこい」と声をかけてくれたのは、前述した石附先生だった。

私は、5月に現地へ赴任したが、4月からの調査でどれくらい予算を執行していたか調べてみた。これまでに従事していた作業員数などから計算すると、すでに予算の1/4ほど使っている。年度内継続予定の調査で、しかも整理作業も行うというのに、1か月で1/4も使って、調査ができるわけないという事態になった。

文化庁が監修した『発掘調査の手引き』に基づいて計算すると、当初予算の6倍はかかりそうだった。先方もそこまでお金はだせないというので、お互いに調整をすることになった。

調整に調整を重ねて、双方の努力で当初予算の2.5倍の予算を計上してもらい、無事調査を終わらせることができた。

このやりとりにも、学術調査と記録保存のための緊急調査の違いが大きく出ている。

3班編成で調査をしていたが、私はずっと関東地方で調査していたので、当時関東地方の行政調査が行っている調査精度から落ちないレベルで調査しようと思って、取り組んでいた。

他の班の皆さんは、学術調査の方法で行われていた。それゆえ、1か月かかって、まだ300㎡も調査していない状態だった。このペースで調査をしていると、数億円規模の調査になってしまう。

それは、一番望ましい姿なのだろうと思っているが、数億円を負担していただけないのであれば、負担していただける範囲で調査を終わらせてしまうか、ちょっと荒い(とても荒いという方もいらっしゃるかもしれませんが)方法で遺跡全体を発掘

することもやむを得ないことと考えるか。どちらをとるか決断しなければならない。

あくまで、現在のように発掘調査予算も調査日程も十分にとれない、行政調査が十分に認知されていない初期の時代のことだ。

[札幌市に採用]

昭和47年の9月に、札幌市で道路工事にかかわる発掘調査があるということで、発掘調査員として来てくれないかと、声がかかった。

北大の大場利夫先生が札幌市文化財埋文行政を指導されていた。人捜しの声掛け役は石附先生だった。3名調査員が雇われたのだが、発掘調査にかかわる道具類が何もなかった。昭和47年以前は、昭和27年の北大遺跡、昭和29年の手稲遺跡、昭和39年の平岸天神山遺跡、昭和41年の北栄遺跡と限られた調査しか行われていなかった。

[白石神社遺跡の調査]

そのため、札幌市の教育委員会の人も、発掘調査とはどういうものかもわかっておらず、必要な道具類についても全くわかっていなかった。人が来れば、すぐ調査ができると考えていたようだ。道具を揃えて、調査開始の準備ができたのが10月。10月からはじめ、雪の降る直前になんとか調査を終わらせた。これが私が札幌に来て初めて調査を行った白石神社遺跡の調査だった。

[札幌市内分布調査]

この遺跡を調査して、次をどうするかということになった。私自身は、東京へ戻ろうと思っていたのだが、札幌市の職員として採用していただけたという話があり、そのまま留まることにした。

昭和48年に正式採用され、まず何を始めるか考えた。その結果、工事が行われる際に、きちんと文化財保護法の規定による届け出を出してもらえるように、市内の遺跡分布調査を行い、周知化することにした。昭和48年と49年にかけて、集中的に実施した。昭和48年以前には113遺跡が確認されていた。昭和48年にはこの113遺跡の再確認も含め334遺跡を確認した。確認できた334遺跡は

早急に周知化しなければいけないということで、2万5千分の1の地形図に遺跡の範囲まで入れ、公表した。昭和49年には、さらに追加確認された遺跡を含め、407遺跡を周知化した。

旧琴似川流域の遺跡及び平成に入り発掘例が増加している篠路・丘珠地区遺跡の発掘状況をOHPで説明。

[高畑地図の発見]

昭和51年、現在は札幌市の指定文化財になっているが、高畑宜一さんが明治27年ころ作成された旧琴似川流域の遺跡分布図の存在が滝川市の高畑さんの厚意で明らかにされた。この地図の発見で、さらに遺跡数が50くらい増えた。これまでと同様、すぐに遺跡地図をつくり、周知化を図った。現在、札幌市では、544遺跡が登録されている。この遺跡地図は、インターネットでもダウンロードできるようになっている。

[札幌に遺跡があるのか]

よくいわれるのが、こんな都会に遺跡があるのかということ。札幌にも重要な遺跡が多数ある。

開発予定地に遺跡があり、工事前に発掘調査が必要、という、昭和40年代から50年代初めにかけては、業者の方が？という顔をする。中には厚意的に「そうですか。ぜひ、発掘してください」とおっしゃる。さらに、もうひとつ「発掘調査をするためには、発掘調査の経費を負担していただくこととなります」というと、ここで皆さん烈火のごとく怒る。「なんで、そんなもの負担しなければいけないのか。法律のどこに書いてあるのか」といわれた。法律には、「保護に必要な指示ができる。」と書かれているが、「発掘調査費用を負担しなさい」とは書かれていない。業者の方々からみると、発掘調査は我々が行うもので、当然、費用も私たちが持つものだと思っている。お金もかかるし、工事にも取り掛かれない。これは怒るのは当たり前かもしれません。

まずは、試掘調査を行い、発掘調査の費用や期間などを設計する。試掘調査は、遺跡の全面を調査するわけではありません。札幌市の場合には対

象地の4%くらいを行っている。これでどのような遺跡なのか把握しなければならない。この作業が難渋なのだ。たくさん掘れば、情報も多くしっかり設計できるが、4%を試掘して全体を類推しなければならないため、なかなか大変。発掘の設計は、知識、経験、勘。それに私が考えるには、もう一つ必要で、それが度胸。かつては、遺跡の発掘例が少なく、データの集積が少ないため、この「度胸」の部分が、担当者に求められていた。

苦心惨憺して調査に入る。しかし、時には全然予定と違い、遺構や遺物がなかなか出ないときがある。そのような時はプレッシャーで、夜飛び起きたこともしばしば。皆さんの中にもそのような経験をされた方はいらっしゃるかもしれません。

平成22年に上下2冊の『発掘調査の手引き』が出版され、それ以前にも発掘調査の積算基準、埋蔵文化財の保存と活用、埋蔵文化財調査の標準、埋蔵文化財包蔵地の試掘調査要領、埋蔵文化財の保護と調査の円滑化、など埋蔵文化財の取り扱いについて整備されるようになった。

これらが示されたことにより、個人の力量によることなく、組織的に客観性をもって、提示できるようになり、知識、経験、勘、度胸の勘と度胸はなくてもよくなった。データに照らして、行動するようになってきている。

[市町村職員苦難の時代]

札幌市の場合、ほかの市町村職員に比べると組織が大きいので、直接顔を合わずとしても、部長課長クラス。

ところが、町村の場合、あの事案はどうなっているのかというように、直接トップからプレッシャーを与えられることも多いと思う。一人で町村の埋蔵文化財を担当された方は、非常に大変な思いをされたのではないかと思う。

昨今はだいぶ体制が整ってきたと思っていたが、今度は財政難で公共事業は縮小され、退職者の補充は行わないという事態になっている。

このような苦難の時代だが、埋蔵文化財の保護・保存と活用の新しい道を切り開いてほしいと願っている。

北海道立埋蔵文化財センター年報14

平成24（2012）年度

平成25年4月30日発行

編集：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115

